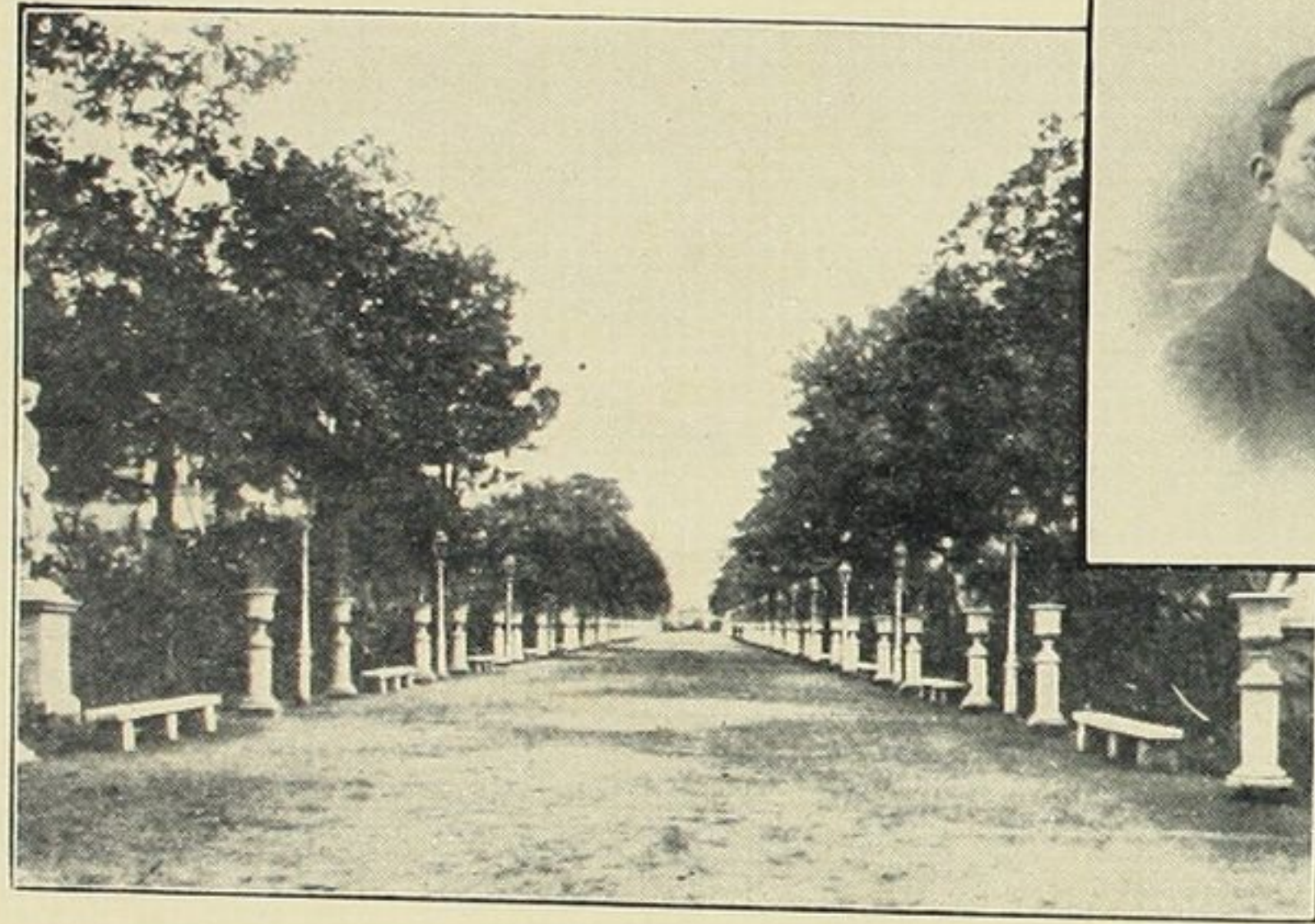


Genetl.

青 春 之 詩

敬 天 牧 童 作

美 育 社



青春之詩に序する

こて

兒玉花外

海の彼方かたに牧童の

君は愛あひでにし羊ゆる

ひねもす岸に歎なげくとか、

『神よ異郷に死しなしめよ』。

その名は戀こひや、失うしなひし

羊は君が鎖くわしたる

心の檻かぎをぬけ出いで、

他あたし人ひと手に身みを寄よせぬ。

哀むなけれ草花の

榮をよるこぶ性なるを

飼ひしを悔ひそ、今更に、

迷ひぞ彼が生命なる。

巖いわの上のの白鳥はくちょうの

妻鳥めどり慕こひて啼なぐごこく

浪なみに歎なげ息いきはげしくば

つひに破やるゝよ君が胸。

破やるゝもまゝよ、この深愁うれひ、

死しして磯邊いそべの貝殻かいがらの

思おもひなきをば希ねがふことも

かくては惜おぼしき眞珠貝。

あゝ追懷おしいでを舟ふねとして

忘わすれの岸きしに往ゆかしめよ、

國くにし愛めづるも目の本の

潮路しほぢにそむけ、捨す小舟。

脆もろく弱よわきは小羊こやぎの

若わかきが罪つみや、血ちの狂くるひ。

罪つみはゆるさじ狼おおかみの

情なさけの衣きぬの花摺はなずりや。

女おんなの長ながき黒髪くろかみの

敷敷へがたなの罪つみのうち

男賣おとこうりりたる怨恨うらみこそ

念おもひたつともねも盡つきじ。

君は牧童、悲みて
空なる檻をめぐるより
迷ふ羊の憐れさに
星に目を擧げ祈れかし。

生くるは罪か、くさぐさの
迷ひ、悪魔のなすところ、
人どうまれし基督も
荒野に出でぬ、試みの。

それは神の子、勝をねぬ、
悔改ひたる靈魂の住む處
天にもろとも邂逅はん日よ
君に歸らむ、永久に。

あゝあゝ友よ過てり、
もどより露を露として
眞とせねばかばかりに
人をも世をも咒詛はじを。

ありて甲斐なき鞭を折り、
月を朝日に吹く笛や、
老いし牧者の心もて
自然と神に慰藉をよ。

人にはあらで現世に
吾にぞ愛づる鳥と鳥
一つは雲雀空に向き
一つは燕海をゆく。

さらば遣らむ、故郷を
忍べの乙鳥にあらねども
瘠せて春なき汝が胸に
友の熱情を傳へしむべく。

青春の詩に序す

「實は、短笛長鞭の原稿を送つた
後は、最早日本語で何も書くま
いと決心して居つたのだ。が、
失戀の結果、一万五千哩の異郷
に客たる僕は、歌はずして生き
ては居られぬ！」
と添記して、今春また更に其の出
版を托すべく余の手に送られたる
ものは、此の詩集即ち青春の詩に
てありき。

青春の詩の多くは、是れ失戀の
詩也。著者を包圍して起れる最も

悲むべき事情が、純正潔白にして、
熱烈燄のごとき著者の感情を刺戟
し、以つて其の抑へがたき憤慨と
煩悶を、歌謠の形に移し發せしめ
たるもの也。

最も悲むべき事情よ、其は、彼
れの前に來れる美しき天使の、忽
如として憎むべき惡魔と化したる
にあり、彼れに來り住まんことを
望みたりし幸福なる家の、俄然と
して、悲痛の事重ね湧くの暗窟と
變じたるにあり。時や、彼れが全
心を傾けて、來れる天使の美と徳
に酔ひつゝありし砌。處や、風物

肅條として、慰籍に餓ゑたる外客
をして彌よ寂寞の感に堪へざらし
むる異郷の地。斯くの如き時、斯
くの如き處に於いて、斯くの如き
事情に襲はる。自ら正なるが故に
他の不正を憤り、自ら廉潔なるが
故に他の破廉恥を憎み、自ら熱情
あるが故に、他の冷淡を恨むの心
ある人にして、此の場合に起れる
聲は、嗟乎實に斯くの如き也。

誰れか、此の歎を指して、以つ
て女々しき聲と言ふや。若し夫れ
茲に人生の戀を嘲り笑ふものあら
ば、其は正しく、春の徳と花の價

値を忘れたるものと言はざる可からず。意匠に富める造物主は、人に戀を與へたる同じ目的にむかつて、自然の一年に春を與へ、多くの植物に花を與へたれば也。

春は雨に依つて亂されたり、花は嵐に依つて破られたり、人は失戀に依つて傷けられたり。此の三個の語は、各其の主辭と賓辭を異にすといへども、歸するところや唯だ一也。

戀は人生の「全^{オトク}」にあらず、要するに「或物^{オトク}」のみ。而かも、「或物^{オトク}」なるが故に重んずべから

ずとすれば、吾人將た何れのごころにか重んずべきものを求め得ん。名譽乎、事業乎、富貴乎。吾人は、茲に「或物^{オトク}」の凝集して成れる「全^{オトク}」を認むるの外、未だ他の一個にして完全せる「全^{オトク}」を認むること能はず。

花が、植物の上に頗る重んずべき「或物^{オトク}」たると同じ程度に於いて、戀はまた此の人生に對して、大に重んずべき「或物^{オトク}」たるの價を有す。

彼れは、一度得たる花を、失ふべき所以なくして失へり。花なき

植物は、同時に果實なき植物たらずや。然り、彼れは、失ふべき所以なくして、また樂むべき此の果實をも併せ失へる也。

酒を貪り飲むことを以つて誇りとなせる、東洋の豪傑は、是れを見て、或は痴戯に過ぎずと罵り去るべしといへども、余は、是れを以て、人生の一大事件なりと切言して敢へて憚らず。

青春の詩は、實に此の人生の一大事件に對して、著者が滿幅の詩態を迸發せるもの也。余は、此の書の、頗る重んずべきを唱導す。

殊に、著者は此の大事事件に際會して、人間のなし得べき、最も高度の忍耐を敢へてし、最も困難なる靜慮を敢へてし、而して、暗黒のうちに光明を發見し、不安のうちに安立の地を見いだし得たり。余は、著者が此の煩悶のうちに、斯くの如き重んずべき詩集を成し得たる其の力量に感ずると共に、また、此の困難と危険に勝ち得たる著者の人格に向つて、寧ろ多く敬服するもの也。

名を知つて實質を知らず、形を知つて精神を知るに迂なる我が讀

書界にも、偶々賢なる讀者なきにあらず、余は、また著者に向つて、著者が自ら費を投じて世に示されたる此の書の、決して徒勞に屬せざることを一言するの要を見る。余は、此の著者を親友として有する余の名譽に導かれて、更に、茲に一文を徵せらるゝの幸福を得たる今日を喜ばざる能はず。

卅五年六月

美育社の一室にて

黒田湖山

自序

われは文學者にあらず、詩人にあらず、たゞ文學を愛し、詩を好むのみ、同情あるわが唯一の友として。

詩人にあらぬわれなれば、いかで修辭の學を知らむ、いかで作詩の法を學ばむ。たゞ止むを得ずしてわが肺肝を吐露せる而已。

萬物すべてわが前途の榮光を謠ひ、雄志胸に躍り、壯圖骨を鳴らしむる年少英氣の時、詩神默示して曰へらく『爾の樂しき希望を歌

へ』と、われはすなはち筆を提げて立ちぬ。

人世狂瀾の渦中に捲き込まれ、手に巻を撫で、而かも糊口の途に疲る。詩神默示して曰へらく『爾の苦學を歌へ』と、われは遂に歌はざるを得ざりき。

嚴冬の霜雪にもまれたる我にも、さすが東風徐に花の香を齎すの春は來りぬ、戀の樂園にさまよふ時、詩神默示して曰へらく『爾の幸福なる戀を歌へ』と、われは勇みて詩神の命に應じぬ。

嫉妬の秋風肌に寒く、快樂の樹葉

を吹き落して、地に朽ちよこ宣告するとき、詩神默示して曰へらく『爾の悲惨なる失戀を歌へ』と、われは涙を飲むで詩神の勅を奉じぬ。

希望は去り、戀は失せ、四周暗膽、北風蕭々、惡鬼は天の一方に哄笑し、心身恐怖に凍るの夜、詩神われに現はれて曰へらく『惡魔の凶暴と人間の罪惡を歌へ』と、われは天に向ひて不幸の由來を語りぬ。飄然故國を去つて四海の風光に接し、渺茫たる大洋に波濤を枕として眠るの宵、細流造化を讚美する

谿間の微風に醒むるの朝、詩神淨
光を放ち、われに現はれて曰へら
く『自然の美妙を歌へ』と。われ
はすなはち起つて水の歌を譯し、
風の聲を寫せり。

かくの如くしてわが詩は成りぬ。
詩神に献げたる祈禱、幸福に對す
る神への感謝、苦惱に對する天へ
の號泣、これ、すなはち、わが詩
なり、わが歌なり。

いかで、人に讀ましむるを得む。

明治三十四年十二月

南米、秘露共和國

里馬府客舎にて

著者しるす

目次

- 月と花
- 破鏡
- 生死無差別
- 三郎さん
- 寫眞の灰
- 汗の塊
- 女
- 一筆啓上いたし候
- 怨恨
- 幼兒
- 人鬼
- かの夜

- メキシコを去ること
- 生母と故國
- わが戀
- ナイヤガラの瀑布
- 川千島
- 失せぬ
- 籠の内外
- 神よ異郷に死なしめよ。
- デスカルスス公園
- 大和撫子
- 塵塚
- 白薔薇
- アンコン
- 俗語雅想

西詩翻譯

- 想夫戀（英）
- いざさらば（英）
- 一來一去（西班牙）
- 題なし（西班牙）
- 睡眠（西班牙）
- 永別（墨國）
- 涙一滴（墨國）
- あれを限り（墨國）
- 定義（秘露）
- 對話（リエネスエラ）
- 不老泉（獨）
- マドリン（佛）



挿
畫

- 青春之詩(表紙)……………小島沖舟畫
 里馬公園と著者……………寫 眞
 月之花(石版畫)……………小島沖舟畫
 ナイヤカラ渦が淵……………寫 眞
 川千島……………寫 眞
 怨恨(寫眞版)……………小島沖舟畫
 アンゴン……………寫 眞

月ご花

原詩は西班牙語にて作れり、
作者みづからこれを和譯す。

『をとめごよ、

水より暗黒の衣はぎて

湖の鏡に影うつす、

月のねもてはなご常に

かくも清けき、くもりなく。』

笑顔のをとめ答ふらく

『其處には天つ使あり、

日ごと夜ごとに飛び來ては

清き接吻するほごに

さればよ澄めり月の面。』

戀知るをこめ答ふらく
すゞしき目もてわれ見つゝ

『否とよ、戀に流すなる

潔き涙はかの月の

面おもてを洗ひ行けばこそ。』

『よし、乙女ごよ、

小き園を匂はせて

春の朝日に笑ひつゝ

咲き出る花はなご常に

かく美はしき、けがれなく。』

笑顔の乙女答ふらく

『朝な夕なに水銀みづかみの

露のしづくはやはらかに

花に接吻くちづけするほどに

さればよ、かくぞ、うつくしよ。』

戀知る乙女答ふらく

『戀ゆへもらす、ためいさは

小き園に迷ひきて

たまの色なす花びらに

匂ひ残して行けばこそ。』

破 鏡

世はすゑ近く人みな
情うすしと聞きしかど
女ごころは浅くして
迷ひやすしと知りしかど。
思はざりしよ、神かけて、
たましゐひとつ身も一つ
ひとつ生命とちかひてし
ことばに裏のありごとは。

言葉にうらはなかりけむ、
いつはりごとは今とても
はかり得ざれごさらばなご
ねにし断ちてと迫りぬる。

肌や、寒き秋の朝
袂わかつはつらしとて
ひぎにそゝぎし涙には
あつき真情まことのこもりしを。

ねやのさみしさ身にしみて
異郷の夫つまを忍べると
雁のたよりに文よせて
あはれ告げしは幾そたび。

いとしの妻よわれども
 旅寝の夢のさめがちに
 ころろ故國の空に馳せ
 戀にやつるとかこちしを。

清き涙に筆そめて

まことのたけを書きこめし
 文字にやさしき面影を
 見むはこよなきさちにして。

躍るころろに手はふるひ
 封切るひまも急がれて
 開けば發矢！わが胸は
 無慘！射られき、創深く。

涙はかれつかなしさに
 血潮はあれつくやしさに
 夢にあらぬぞうらみなる
 戀しき増すぞいたみなる。

『君のいつはり知るからは
 ともに棲はむことぞ憂き
 短きねにしと思しめし
 いとまを賜へ永久とこしへに。』

かはればかはる心よな
 天つ使もいなづまの
 空にきらめく一刹那
 まこと悪魔となりけるよ。

悪魔となるはやすけれど
 天つ使にかへらむは
 かたきゆへにか汝はつひに
 頑き思をかへざりき。

悪魔はくしき力もて
 罪なき夫の心根の
 白さを黒く見せにけむ
 説けども耳をむけざりき。

安けき家庭の船やぶれ
 希望の島もなき海に
 浮きつ沈みつたよふも
 これや運命、是非もなき。

岸の燈光は消えうせて
 わが行く末は暗けれど
 心の底を知りませる
 神に審判をゆだねつゝ、

荒き浪間に枕して
 天つ使の樂に和し
 過去をば夢とうたはなむ
 こゝろの創傷は癒はずとも。

生死無差別

世界の真中に標柱くまうてば
 まへはひがし、うしろは西、
 右はみなみ、ひだりは北。

世界の真中の標柱くま抜けば
 ひがしは西、西はひがし
 南北無差別、無東西。

現世の真中に立つときは
 生れ出でつ死にゆきつ
 來去の別を目に見れど、

三世はなれて見わたせば
 過去あらず未來あらず
 生死無差別、來去これ一。

三郎さん

(節曲をつけて歌ふべきもの)

三郎さんは好い兒
牛乳で肥わて
わくぼが二つ。

三郎さんは賢い兒
幾歳と聞いたら
れ手を出して、

拇指屈めて

小指を握つて

『三歳だ』と對へた。

三郎さんは小さい兒

まだ背が低い

餘り椅子が高い。

三郎さんは豪い兒

直ぐに這つて上つて

腰をかけて威張つた。

それでまだ低い

足が宙に下がつて

下りるのに難儀。

三郎さん、それ御覽

椅子から這つて

れ裾がまくれた。

三郎さんはまだ小供
御飯のときに
お箸が持てぬ。

お匙でかき込んで

お口を汚して

御飯の雨がばら／＼。

可笑しいと聞いた、

お芋がころんで

三郎さんが追かけた。

お母様笑つた、

三郎さん怒つた

怒り直して笑つた。

三郎さん何が好物

牛乳がすきで

大きなコップに一杯。

餘りコップが大きい

餘りお手が小さい

片手じやコップが持てぬ。

両手でかゝへて

重さうに持あげて

うまさうに飲むだ。

三郎さんのお顔は

コップに呑まれて

戸柵の中へ這入つた。

諧謔言つたら笑つた、
 大きなお眼を丸くして
 コツブの蔭でくすくす。

笑つた拍子に

三郎さん咽せた

涙がこぼれた。

三郎さんは強い兒

泣くかと思つたら

にこくと笑つて、

『こんな事でなくもんか、

いくら眼が泣いても

僕は泣かぬ』と力んだ。

うつしねの灰

いとしきものゝ姿とて

今日が日まではよるひるに

肌身はなさずもちしかごと

見るさへ今は恨なる。

ねにしの糸の絶われば

仇なる人のうつしねを

秘めむはなまじひ憂の種

見ればむかしの忍ばれて、

くるしき胸をいやさばや
 忘れがたきを忘ればや
 思のたねのうつしねを
 煙と灰に焼きすてゝ。

幼きときにうつせるも
 戀歌かきて贈れるも

二人ならびて撮りたるも
 ふるふ手もとに打ち束ね、

そゝぐ石油あぶらにくやしきの
 涙のしぐれ降りませつ
 まなこつぶりて投げやれば
 ばつと音して火はつきぬ。

さびしき間に幾そたび

わがくちびるを押しあてゝ
 せめてはこゝろ慰むる
 よすがとなしゝ寫真うつしねは、

いな、この胸にうちもたれ
 手にこの手をばいぢりつゝ
 『二人はいかに楽しき』と
 つげゝるいもが寫真は、

いま火の中に火となりて
 燃ゆれどもゆるわが胸に
 残るもあはれその姿、

忘れがたきか、何とせむ。

胸の火焰は消えなくに
 焼きて棄てぬる寫眞は
 ありしかたちをありのまゝ
 残るよ、灰の喪服着て。

煙は天空に消えぬるを
 蝶となるかや残る灰
 鳩となるかや残る灰
 舞ふて野に行け森に飛べ。

汗の塊

終日の勤勞なし果て、
 肉はなへ骨ゆるむまで
 疲れたる身には安けき
 休息こそ無上の快樂。

狭くとも一間はわが家
 かたくとも一几の寢臺
 うすくとも一枚の毛布
 海外出稼の身には足るらむ。

製糖所の物音静まり

黒奴の鄙歌も止み

をりくの驢馬のいなぎ
聞きなれて驚きもせず。

さはれ身は妻子のこして
故國遠く大洋をはるかに
言葉さへかよはぬ外國に
勤勞するこゝろ細さよ。

四年てふ契約の月日

短くも寂しき身には

一日も千萬年の思ひ

浮世かな、金銭が敵の。

金銭ゆへに勞働賣りて

自由ならぬ籠鳥の身や、

勞働はなに辛からむ、

胸の苦痛にくらべては。

一家のため、また、國家のため

行末の幸福をはかりて

熱き日にたらす汗水

鍊りあげて黄金にかへむと、

腕かぎり力をつくし

働きて做衣をしのび

稼ぎては粗食をこらわ

貯へし辛苦の収穫。

洞卷にかたく藏めて
 寝るときも野に行くときも
 手離さぬ汗のかたまり
 笑ふなよ、汗くさしとて。

汗なればさぞや匂はむ
 血まじれば温氣もあらむ
 月に泣き、星に物思ふ
 涙にて耀きもせむ。

待ちうけし年期は明けぬ、
 貯蓄の黄金のふくろ
 重けれどこゝろは軽く
 海こゝにて急ぐ故郷。

野も山も草も木も
 われ待つか、古き土橋も、
 茅屋の門に立てるは
 妻と子か、やれ、うれしやな。

かけ出で、取りすがる妻
 父と聞き抱きつく愛兒
 無事の顔、見まもりつ見つ、
 躍る胸、喜悅に裂けむ。

家内に入り草鞋脱ぎすて
 旅衣かゆる間もなく
 兒は膝に妻は間近く
 慰むる多年の勞苦。

それ土産、畑も買ふべし
 學校に明日より通へ
 頭髮裝飾、帯も着物も
 欲しきもの、買へやこれにて。

重げなる袋ひらきて
 つかみ出す黄金白銀
 あな不思議出せごも盡きぬ
 底しれぬ財寶の泉

兒は狂ひ妻はねごろき
 われながらわれを忘れて
 あつとばかり魂消ゆる聲
 黄金の山、あはれ、崩れぬ。

見しや夢、惜しくも覺めて
 短夜の空明けはなれ
 なりわたる『起床』の鐘、
 肌にしむ異郷の朝風。

女

(律脚不同)

秀の秀、美の美、
 智あり、才あり、
 徳あり、力あり、
 天地の創造は、
 女のつくられしによりて、
 完きを告げぬ。

白百合の花はうつくし
 しづかにうなだれて
 青き葉に露もつ風情
 されど紅の頬に
 美妙の笑くぼたゝふる女は
 自然の花にまさる人界の美花。

闇にきらめく珠玉は貴し、
 されど青空の星のごと
 愛の言葉にかゞやく
 女の雙の眼は
 日月の光をかくせり、
 神の生命をもてり。
 歌ふ鳥の聲やゆかし
 木より木に森より森に
 天來の樂を奏し行く、
 されど鳥のうたよりも
 變化に富めり女の聲、
 生命は充てり、女の喉。

天地の美、自然の秀、
 一身にあつむる女は
 げに『美妙』の化身、
 さればこそ
 美の美なれ、秀の秀なれ、
 されば、天地の創造は
 女につくられしによりて
 完きを告げぬ。

一筆啓上致し候

(讀むべからず、歌ふべし)

學校から歸りに
 道ばたのくろに
 藁と毛を持ちはこぶ
 二羽の頬白見つけたり。
 學校から歸りに
 道ばたのくろの
 いばらの中に綺麗な
 頬白の巢を見つけた。

學校から歸りに
道ばたのくろの
頬白の巢の中に
三つの卵見つけた。

學校から歸りに
道ばたのくろの
小さい巢の中に
可愛い雛を見つけた。

學校から歸りに
道ばたのくろに
巢立つたまゝの
頬白の飛ぶのを見つけた。

學校から歸りに
道ばたの森に
囀る頬白の歌はこれ……
『一筆啓上致し候』。



恨 怨

怨恨

水の碧きは深さゆへ

天空そらの青きは高さゆへ

怨恨うらみはあらし戀なくば

憎悪にくみはあらし愛なくば。

處女をこめのみかは益荒雄の

たきけ心も戀路には

物の黑白あやめをわけかねて

暗夜と迷ふ人の常。

雪より白き一片の
 真情戀に解けそめて
 愛の光をうくるとき
 戀愛はその身の『すべて』にて

親あらず、また、君あらず
 名は塵ほども重からで
 羞辱を忍ぶも戀のため
 忍び力も愛のわざ。

裂けざる胸のあるべきか
 心のたけを積み入れし
 戀てふ船の幸なくて
 岩に碎かれ失せむとき。

生きむ希望の残らむや
 心靈の生命握るてふ
 愛の花枝時ならぬ
 風に吹かれて折れむとき。

この時こそ世は闇黒
 靈魂の天空かき曇り
 血は恐怖と悲痛に凍り
 骨と肉慄ひわななく。

多情多恨！罪あらぬ
 こゝろの思ひの深ければ
 無慘！失戀の太刀削
 いやゝ強くいゝゝ重し。

傷を負へる獸王ならねど

苦しきあまるもの狂ひ

吼ゆる聲、耳をつらぬき

荒るゝ物音、木玉に響き、

溢るゝ血潮草を染め

人にふるれば人を裂き

岩にあたれば岩を咬み

谷間に碎く、あはれ身の果。

よしや獅子とは猛らずも

戀愛の焔を消されぬぞ

こゝろは解けぬ厚氷

涙もあらず、血もあらず、

さも冷かに結ばれて

さびしき陰府の海原を

暗夜通して永久に

めぐる愁傷はてもなし。

この世に成らぬ戀ながら

蓮の臺をたのしみて

手に手をとりて身をなぐる

悲哀の歴史、水に澄み、

つれなき情人をうらみつゝ

心の無垢を知れやとて

荅を散らす高塔に

清き思は高く聳ゆ。

戀の敵を刺し通す
 怨恨の刃血に錆びて
 遺る汚濁も拭ひ見ば
 誠意の露や滴らむ。

身をなげく失戀の男子
 自殺をはかる毒盃の
 くもれる罪惡も洗ひ見ば
 ひかる涙やかゝやかむ。

ことほりなり心狂ふも

わが世は梢拂はれて

いかりの炎火天をやき

破鏡のなげき地を毀ち、

川裂け山崩れ落ち

日はかくれ、月は投げられ

星は飛び、雲は逆捲き

宇宙混沌光明なし

耳あらば聞け昨日まで

夫とよばれし身の今日は

無量の怨恨噛みしめて

死の蔭になく虫の音を

さても頼みがたきうき世

さても苦しき身と心

うらやまし戀てふものを

知らで死に行く人の身は。

花の木蔭に手をとりて
 朝あしたに戀をかたるとき
 そら晴れ渡る春のごと
 心は戀に匂ひしを。

夕暮露をふみわけて
 行末の幸福はかるとき
 月澄みかへる秋のごと
 心は戀にひかりしを。

短き紙に長き思をこめ
 黒き墨に赤き心をうつし
 艶書ふみのとりやりに餘念なく
 すごせしむかしかへり見よ。

逢うては速く別れては
 遅きをかこつ『時』の速度
 人目の關の戸もどかしと
 心あせりし日を思へ。

いなく慕ひしたはるゝ
 ふたりの願望ねがひ仇ならで
 神のみ前に世をはれて
 ちぎるわにしや戀の糸、

世は滅ぶとも切れざらむ
 よしやうき世の浪風は
 暴れにあれつゝ寄せくとも
 ふたりの身体からだ一つにて、

一つこゝろに慰めつ
 慰められつあたゝかき
 家庭を平和の王國とせむ
 ねがひ嬉しき共住居、

夜半の寐ざめの睦言に
 鴛鴦のつがひも憎くからず
 野邊にたはるゝ双蝶の
 さまも妬むに足らずとて、

地上の天國を夢み
 現世の幸運をいのり
 やごりもせざる子の名まで
 あれよ、これよと選びつゝ、

かはり給ふなかはらしと
 立てし誓にいと堅く
 二つの心靈むすばれて
 解くべきすべはなかりしを。

遺恨は無限！あわれ世の
 からき嵐は吹きすすさび
 たのしき夢は破られて
 さむるわが身は波の中。

かなしからずや妻とよび
 夫とよばれし身ながらに
 名さへつめたき義理の兄
 義理の妹と呼び合ふは。

腸寸斷、心は微塵
 むごや、生命は取らずして
 毒ある爪に身をむしり
 にぶき及に骨刻む。

さるにても、怪かしき限り
 世の人はかくすみやかに
 好むものを厭ひ得べきか
 いとしきものを嫌ひ得べきか。

腥なまぐさき陰府よみの魔風まふうに
 清き心も腐りけむ
 さかしき蛇うへの美言うつくしに
 強き思念ぢんぱんも惑ひけむ。

悪魔はなれを雲しのぐ
 高峯たかねに遠くみちびきて
 富貴とくみの巷ちやうを見せにけむ
 權勢ぢからの都みやこしめしけむ。

富貴とくみの光輝ひかりにくらみてか
 高き位たかねに見とれてか
 さては、棄てしよ、この身をば
 夜半の涙に瘦せよとて。

やせるは、まだし、いとほねど
 心こころ靈たまの創つくのいと深く
 寢ては泣き覺めて苦しみ
 いやし難きを如何にせむ。

半身たるなれと共に
 苦樂わかたむ爲にいき
 汝れを希望のぞみとたのみつゝ
 世にいそしみし我なれば、

有りて甲斐なきこの生命
 絶たむはいとど易けれど
 七たびわが身殺すとも
 死なぬ怨恨うらみのあるものを、

よしや生命を絶てばとて
 絶つに絶たれぬ荒繩に
 永劫えいこくこゝろいましむる
 この苦恨くるしみとこの煩惱まよひ、

消さばやと思ひ定めて
 氷の刃やいば抜きしは幾度
 拳銃額ピストルに押しあて、
 引金に指かけしは幾たび。

さはれ思へば死ぬるとて
 死なぬ心こころ靈たまのわが創きずは
 いかでか癒なをむ忘れむ
 絶つも益なき生命ぞと、

悟れば死にて後のちになは
 残る怨恨うらみのおぢられて
 露惜つゆをしからぬ呼吸の根も
 どいめかねたる身の因果。

兎やせむ角やと煩ひて

心、生死の境目に

行きつ戻りつうなだれて

兩腕くみつさまよふ時、

陰府よみの使の來るにか

遠くどゞろき程もなく

近く聞こわて身を搖る

車の響、馬蹄ひづめの音。

何者ぞ肥馬に鞭くれて

こゝに來るは？と見かへれば

無念！殘忍！陰府よみ！地獄！

一人は汝れ、一人は…一人は…

問はでも知るゝ戀の敵かたき！

過失ごがはよしわれにありとも

いとしき汝れをつれなくも

もぎ取りたる戀の敵！

かれも憎し、汝れも憎し、

汝れが美はしき姿を見ては、

醜みにくかれとは願はねど

汝びが美ひとに一入ひとの怨憎うらみ増す。

身はやつれ、色香あせて

世をばはかなむ尼寺に

戀忘こいわすればやと讀む經きやうの

細くかよはき聲きかば、

折れて挫けて、碎かれて
こゝろ粉にせむ我ながら
凍る思念も溶かされて
涙にくれむ我ながら、

不義の榮華を恥ぢもせず
『第二の夫』の手にすがり
これ見よがしに誇り行く
さまには胸もはりつめて、

創にぐらるゝ苦しさを、
五臓六腑を絞られて
流すに血なきわが思、
亂れでや、否、狂はでや。

貧しきわれを笑はゞ笑へ
富める新夫を誇らば誇れ
わがものとして愛らしく
他人につけば憎きは戀。

あゝ、かつてわれを抱きし手に
昨夜その男子を……！
わが唇にふれし唇もて
今宵その男子に……！

嫉妬は戀のあまりにて
怨恨また、愛のあまり、
わが泣くを樂むか、二人は、
わが苦むを喜ぶか、二人は。

いづれにもせよ、恕すには
 流石にかたき所業なり、
 妻に賣られし夫の身は
 妻を奪られし夫の身は。

燃^いでや胸の瞋^{しん}志の焔
 理非の別を焼^き盡^くして
 沸^かでやは總身の血潮
 分別の堤、崩^して。

昨日まではわが肉の肉、
 血の血、骨の骨、心の心、
 今日^はわが無限の怨恨、
 無窮の増^い悪、畢生の仇^あ敵。

花を散らすは好まねど
 戀のうらには嫉妬あり、
 愛の裏^{うら}には怨憎^{うらみ}あり
 引き止めがたき意馬心猿。

眼血ばしり髪逆立ち
 噛みしむる唇やぶれ
 耳はいかりの爲にあつく
 齒はいきごほりの爲にきしり。

戦く身をば進ませつゝ、
 慄^か腕^なをさしつけて
 放^いつ復讐^いの銃^いの音
 『罪人、知れ』と聲あげぬ。

響は四方に散りはて、
 消ゆる硝煙けつえんともろどもに
 ありし姿は失せながら
 残る心のうらめしさ、

身を長椅子に倚せかけて
 拳銃ピストルかたく握りつめ
 背せなにあふる、油汗
 つくためいきや意味深長。

あゝ迷、わが心の迷、

あゝ、幻、さても苦しき、

あゝ夢、たゞ一場の夢、

あゝ現うつし、さても苦しき。

浮世は夢と誰れかいふ

夢は瞬時の回想なり、

また、空想の反射なり、

夢は夢、現はうつし。

よしや浮世は夢にせよ、

樂しき夢はうれしくて

悲しき夢は痛ましく

迷悟をわかつ原動力や夢。

げにや、人多けれど友稀に

友ありとても同情なまじけある

心の友は跡絶わて

身は、これ異郷の一孤客。

かなしめども慰籍を得ず、
病み臥せど温き手の
看護に細るさまも見で、
天地寂寥、身は孤獨。

十年の苦學泡と消ね、
千年の遺恨胸に彫られて、
うらめしき故國の昔時忍ぶ、
神は無慈悲、天は無情！

人はいふ、これ天の運命、
定まれる神の攝理と、
運命にせよ攝理にせよ、
樂は樂なり、苦は苦なり。

もし瞬間の快樂は、
かぎりなき苦惱うけむ、
爲にてあらば神の手も、
誘惑の手また惡魔の手。

人を誘ふ力に富める、
惡魔は神の神にして、
運命は惡魔の妖力、
攝理はその怪意たらむ。

いなく、我れは信ず確信す、
神は永久に義なり愛なり。
義の泉、愛の源、
惡ははろび、善は榮ふ。

されば天の無情をうらみ

神の無慈悲をかこち、

身をはかなむも甲斐なしと、

悟りつくせるわが身とて、

人の罪、ゆるさばやと

思ひ直せしは一度ならず、

むかし忘れむ心より、

世の塵深く埋もれ見れど、

激浪怒濤の世の海は

家庭てふ島をねもはしめ

無情の嵐今更に

愛の燈明を慕はしむ

婚筵つぐる寺院の鐘、

悲しき胸の記憶に響き

手を引き合ひて歩む夫婦

痛む心の聯想に映る。

さては世を棄て山深く

身はのがるれど執念くも

われ追ふ過去の夢つらく

時になげき、時にいかる。

里遠く人跡絶わたれど

鳥の聲音、花の色香

雲の行衛、水の私語

いづれか思ひの種ならざる

夜半の狐も友をよび、
夕の鳥巢にかへる、
木にも連理の枝はあり、
岩にも雌雄の名はあるを。

眼なくば、むしろ、安からむ
耳聞ゆるぞうらみなる、
否、眼なくとも耳なくも
わが身を如何、わが心を如何？

あゝ、記憶を消すの『術』はなきか、
精神を溶かすの『酸』はなきか、
心霊を蒸發せしむる『熱』ほしや、
萬有を滅す『力』欲しや。

過去は諦むべきものにせよ、
悟らむとして悟り得ず
諦らめむとして諦らめ得ず
迷ふ心の苦しさを。

忘れてもまだ遂げやらぬ
戀をはかなむ身とは思ひそ
ふたりは永久に大神の
み前に妹背ちかひしを、

さなり、神の合はせ給へるもの
人これを離す能はざるに
刹那に永く引きわけられて
一心同躰の實なし、名なし。

汝れは聖き戀愛の罪人
 神の義罰にかゝるべく
 われは失戀の犠牲となりぬ
 身をなげくべく、世を怒るべく。

聞かずや、義の神のみ聲、
 高さ天空より宣りたまふ、

『天をかけり、地にひそむとも
 罪の身に平安あらず、』

『富貴の蔭にも良心の
 聲の拷は汝れを撃ち
 權勢の楯をたのむとも
 怨恨の一念汝れを追ひ、』

『夜は安眠を驚かして
 『天罰、見よ』とあざ笑ひ、
 晝は幻の中に立ち
 『罪人、知れ』と言らむ。』

あゝ、神のみ聲は、これ、嚴命、
 これを論ひ之れを拒むは
 人間の權能に過ぎたり、
 人間には只服従の義務あるのみ。

運命なる哉、攝理なる哉
 運命は最峻嚴なる法律
 攝理は最高、最後の判決、
 控訴すべき法庭あらず。

我れをして運命と攝理に服せしめよ。
 我れをして憐れなるエノクたらしめよ。
 我れをして悲しきバイロンたらしめよ。
 琴を撫で、わが運命を歌はしめよ。

夢ならぬ過ぎこしかたも
 空なる夢と悟らしめよ、
 諦らめられぬ身の不幸も
 諦らむべきものと諦らめしめよ。

多情多恨戀愛なくば
 怨恨あらし憎悪あらし
 浅き水はすすき透り
 低き天空には色なけむ。

愁環無端戀愛ありて、
 茲に怨恨あり、憎悪あり、
 淵深くして水碧く
 天高くして空色青し。

をさなご

『無邪氣』の化身、『無垢』の變相
をさなごに見よ、天使の面影。

天鷲絨のごとやはらかき髪
手に撫づるとき邪心はらはれ、

勞苦の刻む皺の波なき
額秀で、平和をかたる。

憂愁にかゝまぬすゞしき眉は
湖水にうつる三日月に似て、

小き呼吸の入りては出でつ
かすかに動く鼻の静けさ。

星かそばかりかゝやく眼
さやけき瞳、活氣をたへ、

揃へる睫毛、しばたゝき合ひ
見張るまぶたに智慧いやあふる。

体内に滿つるきよき血潮は
絹をあざむく、皮膚を透けて、

いとあざやかにめぐりて流る
わくばの頬に桃をならせて。

乳臭き口かろく閉ざして
神を誑はす、人をうしらす、

開けば舌はまはらぬながら
甘く湧き出づ愛の言の葉。

雪と見まがふ齒は生ひそめて
乳房に残す消わやすき痕。

鼻の下には蜂蜜の溝、
あざとに凹む甘露の御池。

物音なべて音楽と聞く
耳はさながら薔薇の花弁。

寶石、金銀、珠玉ならぬ
造物主のさづけし首輪と腕輪、

貴からずやあはれ巨萬の
富も買ひ得ず、天與ならでは。

毆たすうたれず盗ます斬らず
罪惡は犯さぬ琥珀の兩手、

指さゝやかに節かさなりて
なすことなしに吸ふも頑是な。

母のふところ父の膝より
ほかには踏まぬ蠟石の足、

打ち躍らせて生命をうたひ
短き股に満足やごる。

狭せまき搖籃のうちに眠りて
心に廣き宇宙を藏め、

夢に天使の群むれと戯たはむれて
笑顔にもらす胸の歡樂。

清淨圓滿、眞と善と美、
天上天下、唯我獨尊、

汚れたる世にひとり聖なる
神の幼兒、裸はだか体にてあれ。

人鬼

こはいかに、圓滿無垢なる、幼兒も
生ひたてば、慾惡煩惱の畜生か。

地に墮ちぬ天使も惡魔となりはてし、
墮落まためてふはかなき運命は人間ひとにもか。

その昔し柔なりける毛髮かみ荒れて、
身を焼くいさごほりらむ憤怒のため天を衝き、

額には勞苦の紀念の皺寄せて
枯れむとす秀眉憂愁のため惱まされ。

眼より星の光、また消に失せて
怖ろしき嫉妬の猛火に暗を射る。

もの凄し、紅の頬の肉落ちて
いや溢る悪鬼の形相満面に。

身を詛ひ神をけがす口毒を吐き
淫聲と邪言に肥わたる耳頑し。

いまはしき殺人の劍手に握り、
憎むべき破壊の鐵靴足に履む。

かゝる魔鬼、幾十億萬世に満ちて
奮闘す生存競争の渦中に。

されば血は廣き野原をも海とかわ
屍は深き潮路をも陸となす。

幼兒の明日は斯くこそ、あゝ罪惡よ、
文明は昨日の野蠻の兒ならずや。

世よ幸福を欲りせば自然にかへれ
人よ平和を欲りせば幼兒にかへれ。

かの夜

戀人に贈るさてはすげにやのことばにも
のしたるを、程經てわがやまこの言の葉
にうつす。

かの夜のこともおもはずや
月あきらかに風かほり
心すみにしかの夜をば
忘れがたきかの夜をば。

わが身に近くより添ひて
窓の外面そとをなれは見ぬ、
迷へるころ迷はせて
あらぬかたへと導きつ。

熟なびたる栗の光澤つや清き
なれが髪毛かみひに風たはれ
すいしき眼まなこかゝやきて
星かどばかりうたがはれ、

遠き車の音おとにのみ
夜のしづかさはやぶられて
『自然』はいともうるはしく
二人がまへにほゝにみぬ。

わが戀、今宵、告げばやと
こゝろの駒ははやれども
いざとなりては氣をくれて
うら耻かしきなれが前、

こがるゝ思ひ胸にもね
たましる内部うちに躍れども
舌の力や失せにけむ
ためらう口のもごかしさ。

されどゆかしきなが顔は
怯ちたるこゝろ鞭うちて
けはしきさかも攀ぢさせむ
勇む魔薬の泉源なり。

なが耳ちかく口寄せて
低きわが聲ふるはせぬ、
『知らでありしか、わが戀を
なれを慕ふの久しきを、

『乙女よわれに答へよや、
この戀さくか、聞かざるか
否とこばまばわが生命
棄てむはやすし、戀ゆへに。』

應答いらへはなくて汝はわれを
こと問ひたげに見守りぬ、
無垢なる玉のその顔に
紅葉の色を匂はせて。

やがて答へぬ、今もなほ
耳にさゝやく聲ほそく

『まことに我れをなれ戀はゞ、
神よ聞きませ、われもまた……』。

夢かよばかりうれしくて
われにもあらず慄へつゝ
わが手になれが手をとりぬ
ちからのかぎりいとかたく。

桃の色なす頬の邊に
うかぶ笑くぼをうかゞひつ
汝が手を近く引きよせて
いとやはらかに口つけぬ。

こまかき汝れがその皮膚に
慄ふ唇ふれしとき
血潮のながれ身の内に
勝閑あげて狂ひしよ。

あはたゞしくも身を退けぬ、
ねためる月のひかりもて
抱き合ふ姿ありのまゝ
寫せる影に驚きて。

二人の視線あらためて
たがひの顔を射りしとき、
ふたゝびなれと抱きしめて
またもやかくと告げたりき。

『感謝す、乙女、天よ地よ、
たからのたから、戀の戀、
幸福いかに大いなる、
われを棄つるな永久に、』

『愛するものよ、汝れなくば
わが一生の寤穹は
暗黒と恐怖と苦痛の
汚がれし衣に蔽はれむ、』

『今宵のごとく明らけき
光明を放つ月もなく
珠王かどあざむきかやける
星すらあらぬ夜のごとく。』

雪なすなれが頸すじに
わが下顎をふれさせて
耳と耳を押しあて、
二人は泣きぬ、うれしさに。

數へ得たりき、なれが脈搏
なれが心臓の呼吸すらも
手にとるごとき聞はにき、
二人のこゝろ一つにて。

エデンにかけるわが心
われに歸りぬ、なが聲に
『誓ふよ、戀人、信せよや、
わが戀二つあらざるを。』

『なれは悲しき世の海ぞ
立てる救拯の巖にて
萬代ちぎるわれはしも
なが困難の慰籍者。』

かはらぬ印うけよとて
 なが口つけしわが額
 心は戀の花園に
 またもや遠く狂ひ行く。

われにかへりてや、強く

『蜂蜜いかに甘くとも

黄金のひかり貴くも

戀にまされる富やある。

『わが名、わが幸福、わが希望
 生命も靈魂もなれが手に

さくげ盡しぬ、いざともに

戀の旅路をたごらなむ。』

かたり終れば叢雲を

さつと開きて月澄みぬ、

わが喜悅も靈魂の

天空に光をあたへつゝ。

月と星とは永久に

二人が戀の證人にて

知る人とはなれども

思ひ出さずや戀の宵。

メキシコを去
るとて。

街路のしめりに驟雨の
あこを残せる夏の夕
友に別かれてたゞひとり
旅立つときの悲しさよ。

旅より旅に住む身とて
旅を憂しとは思はねど
住みなれ見れば異國も
また故郷と思はれて。

いつもみどりのメキシコよ、
よしやわが身は山こわて
川をわたりて海とほく
汝れに別れて行くとても。

心はつねに澄みわたる
空に残りてアラメダの
匂へる園にさまよはむ
わが戀人と手を組みて。

花なき里は惜しからじ
戀なき生命何かせむ
わすれ難きは花ゆへぞ
わかれ惜むは戀ゆへぞ。

戀しき乙女あとに見て
 首途かきてを勇むものやある、
 思ひはあとに身はさきに
 瀟車くろまの窓にわが涙。

涙にくもる眼をとめて
 今を限りと見かへれば
 花の都はたそがれて
 わかれを告ぐる瀟笛一聲。

生母ご故國

もし母てふことばに愛こもらば
 養ひれやもしたはしく
 繼母まははもうみの母とかはらじ。

もし國てふことばに愛こもらば
 歸化したる他入ひこの國なつかしく
 住む異郷も故郷ふるさとの思あらむ。

されど母のいとしきは
 母てふことばの故にあらで
 その胎入はらより生れ出でたる
 亡なぼしがたき紀念あればなり。

故國の忘れがたきは

國てふことばの故にあらで

その山川よりうみ出されたる

消すに消されぬ歴史あればなり。

わが戀

いつはりならぬわが戀は
 日ごとに深さつのれども
 夜ごとに厚さまされども
 憎くや人目の關の戸は……。

人なきをりに美しくしき
 汝が手をかたく握りしめ
 無言むごんのうちに戀やごす
 わが眞情まごころをあはれめや。

なれがあたへし一枝の
 薔薇の紀念をとり出で、
 忘れがたき面影ぞ
 迷ふこゝろを汲めよかし。

聖くたゞしき戀なれば
 神はすべてを知りませば
 天なる神の御前には
 かくすに足らぬ戀なれど、

人目をしのび打とけて
 ふたりが胸の思をば
 告げむ願はありながら
 好機を待つ間の苦しさを。

人目しなくば機会よくば
 わが手に汝れを抱きしめて
 かぎりなき世の末かけて
 遂げまほしけれわが戀を。

ナイヤガラ
の
瀑布

天地なりし太古より

百雷のさながらに

落つる音してれこそかに

瀑布はくすしき大神の

みわざをこゝに歌ふかな

八千代のするの末までも。

大陸は名にをふアメリカの

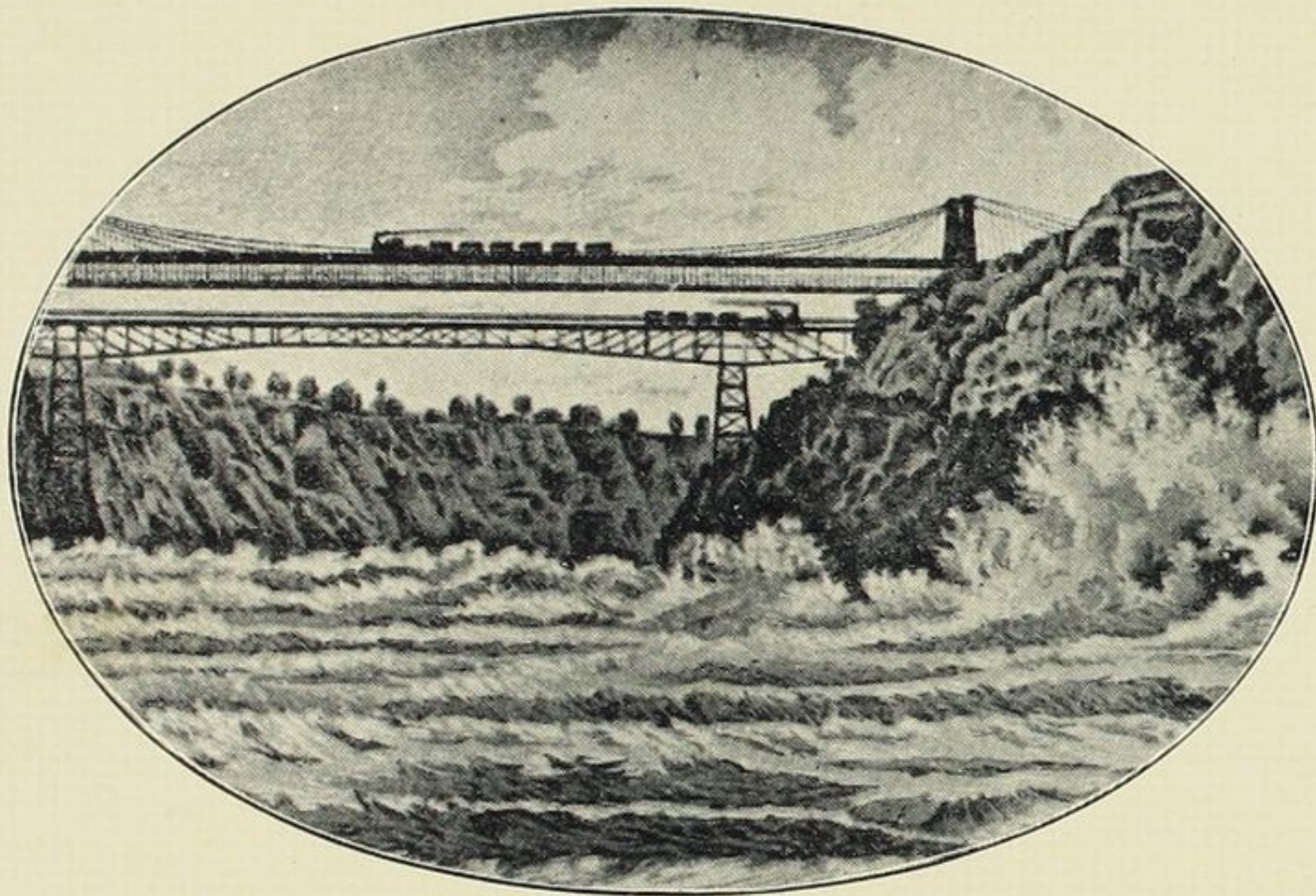
みごりの色の谷々の

小川の水を集めきて

イリーの湖にやすませて

はれなる演伎にかゝれとて

しづかに北に導けば。



笑くぼたゝふる水はしも
行きかふ舟をくすぐりつ
岸邊の草に戯むれつ
島の肩をば打たゝき
今は道をば急ぐとて
さゝめきながら流れ行く。

93
島にせかれてみぎひだり
わかれし水のやがてまた
同伴ごもに手に手をとりあひて
何ををかしく語るらむ
途中みちに美人を見たりとや
これよりさきの樂しとや。

青葉に匂ふ山羊島の

ふたゝび水をわかたつき
橋につながらる。姉妹の
三つの小嶼を指すもあり、
岩間に櫂こしをやるもあり、
石にくだけて散るもあり。

ねむればいと静かにて

鏡と見ゆる水なれど

勇めば高き波となり

天空の色なる水なれど

狂へば白き口あきて

はるかに飛ばす泡や花。

東をはせて行く水は

プロスペクトの公園過ぎて

あはれを語る「アヴェリー」の

岩にことゝふ暇ひまもなく

チャピンの島に鞭むちくれて

いま絶壁のはし近く、

バスの小島にむかへるは

舟を名にもつ小嶼しま二つ

鳥の姿の小嶼こしま三つ

古木の根元洗ひつゝ

暇ひまをつぐる月の島

水は奈落の底さして。

あなやと叫ぶ間もあらで
 躍るや水は真しぐら
 音すさましく聲すごく
 千尋の底の底突きて
 碎けて落つる瀧つ瀬の
 さまはこの世のものならず。

千すじの糸を百よろづ
 あつむるとてもこの瀑布の
 つかの間をさへ寫し待じ
 布の八千卷百千たび
 あはするとてもこの瀑布の
 一間を寫すこと難し。

高さは間を二十八

廣さは町を三つばかり
 糸をかくるにたとへむや
 布を洒すにくらべむや
 天、地に墮つる響して
 海をかへすに似たらずや。

そのかみ近くすまひける
 土人がいかりの神ぞとて
 みめうるはしき乙女子を
 楓の獨木舟にのせ
 としごと牲にそなへける
 故事聞けや瀧つ瀬に。

『岸にうたひぬ唄女は
 聲もあはれに乙女子の
 舟は流れぬ消ぬ失せぬ
 空に棚引く水ひぶり
 虹の「オーレオラ」あざやかに
 乙女の姿にねぼろなり。』

燃ゆる泉に湧き出づる
 チベツの里を西に見て
 あるはこなたに山羊島の
 岩根にむせびかなたには
 カナダの岸やダフエリンの
 島を撫でつゝ行く水は。

廣く流れて廣くのび
 深く走りて深く落つ
 落ちくる形さながらに
 馬の蹄鐵くづにぞ似たるごと
 その名にちなむ瀧つ瀬の
 轟く音に名も高き。

四百餘間を幅として
 高さは間を二十六
 落つる勢ひ、電光の
 きらめくごとく物音は
 萬鬼魔界に荒れすさび
 閃をあぐるにさも似たり。

巧なるかな造化の業
 森の木ノ葉に琴を弾き
 野邊の草葉に月やごす
 水のしづくの數よせて
 莊嚴、絶大、強偉なる
 美觀をこゝに見せ給ふ。

鬼蘇にもうつくしき
 花を咲かす神の手に
 なれる景色のやさしさよ、
 驚天動地の淵の上
 天つ使にわたれとや
 仰げば涼し虹の橋。

父瀧と母瀧とにまもられて
 二つの島に抱かれて
 笑顔にねむる兒瀧見よ。
 後部は岩の壁白く
 洞に吹き入る風清く
 水の裏見る心地よさ。

兒瀧は夢に歌ふらく
 『忘れもやらぬ、さる年よ、
 いと愛らしきアンチツタ
 家族の群の寶とて
 若き男子に手を拉かれ
 笑をたへてこゝに來ぬ。』

『罪なきものよ幼女は』

「なれをこの瀬に投げばや」と

あらぬ男子の戯言を

まことと思ひねごろきて

ひかれし手をばふり放ち

逃げむとあせる一刹那。

『あなやと抱く間もあらで

乙女はさきに若者も

後につゞきて瀧つ瀬に

あはれ姿はきわぬれど

かなし乙女の聲はなほ

今も響くよわが耳に。』

あれも深き瀧壺の

底の底には何か接む

水は煮わてか沸きかへり

泡立つ淵は渦巻きて

一たび高くまた低く

回旋風と暴るゝ怖ろしさ。

『霧の乙女』のやさし名と

風雅の客の数のせて

渦巻く淵にゆられつゝ

瀑布の下ゆく汽船軽く

大洋の暴風のいや猛る

さまを溪間に寫すかな。

怒れる瀑布の噴く霧の
 風のまに／＼近く来て
 漚船ふねを洗ひつあるはまた
 遠くへだて、夕立の
 晴間を見する程もなく
 やがてしぐる、面白さ。

しぐる、天空にうす黒く
 虹やかゝると見上ぐれば
 人智の精もて築つきあげし
 兩岸きしをつなげる鐵かねの橋
 雲に聳たつて柱さへ
 あらぬに繁し車馬の音。

吊橋二つまだ過ぎて
 狭き溪間にせかるれば
 水はまたもや狂ひつゝ
 岸を搏つかちては岩を噛み、
 獅子と吼なわつ虎といかり、
 『渦が淵の急流』音すこし。

高き響に耳つぶれ
 早き流れに目はくらむ
 げにや水泳すゐに名を得つる
 ウエツブの腕もくじかれて
 名所の水に今もなほ
 悲しき歴史残すかな。

急流の進路折るゝ所、
折れてふたゞび曲るところ
聳ゆる絶壁の高き屏風に
圍まるゝ舞臺畫の如く
最後の曲を舞はむとて
楽しき水は打つれ旋る。

『めぐれよ、めぐれ、ともどちよ、
うごくは水の生命にて
めぐるは水の歴史なり、
まはれよ、まはれ、ともどちよ、
はしるは水のつとめにて
まはるは水の遊戯なり。』

うたひつ舞ひつ踊りつゝ
めぐれる水の『渦が淵』
四周の水の力もて
押し上げられし水碧く
あふれて築く水の丘
だゝよふ泡や雲と見む。

かくてうれしき水はしも
演技と遊戯に疲れけむ
流れ行くまゝ語り合ふ
聲もさすがにいや低く
岸邊の花に目もふれで
歩みもいごゝものうげに。

電氣車通ふ、吊橋を

すぎて見かへるルウイストン

クウインストンの邑々に

つづる別れもそこ〜くに

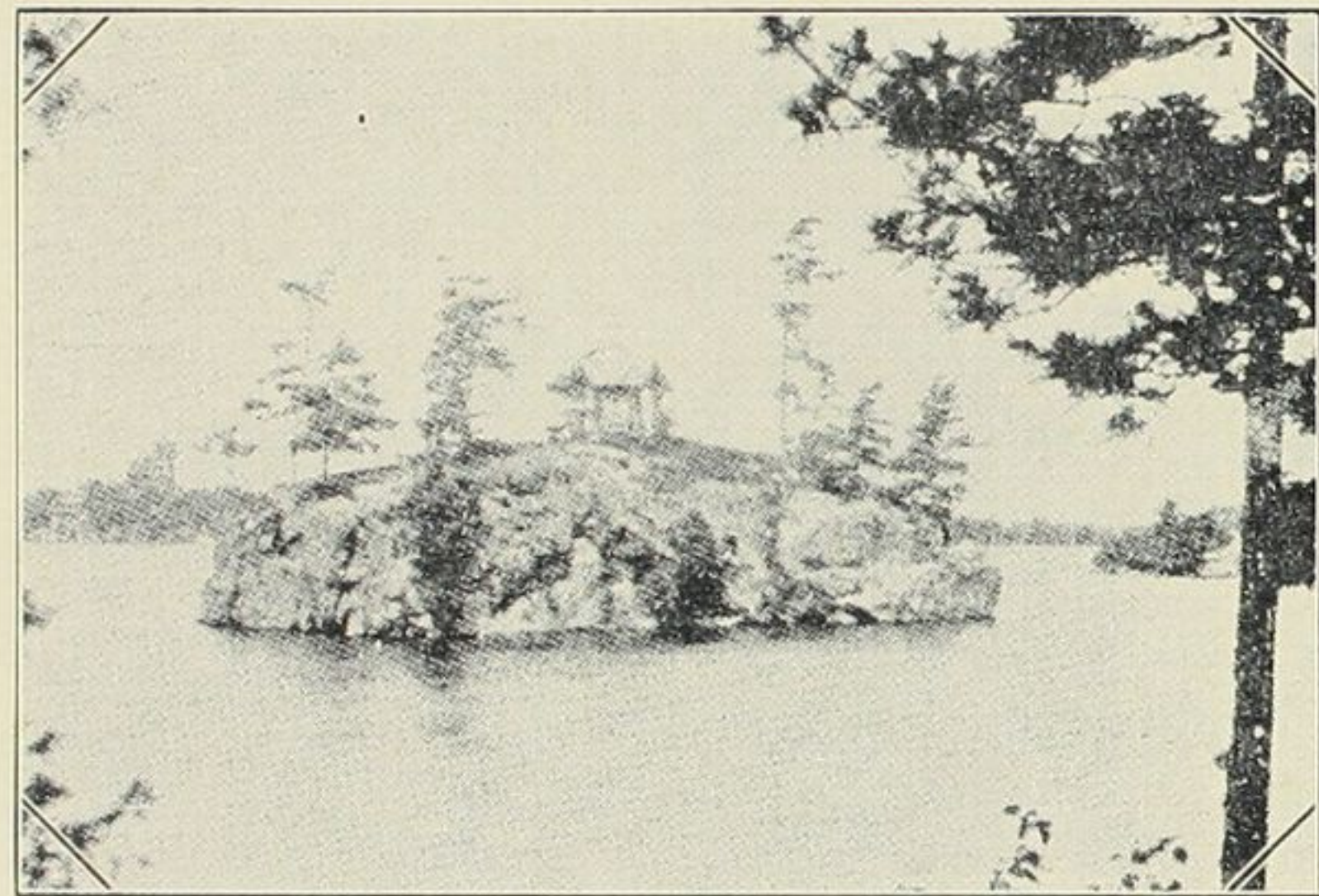
夢心地よく眠り入る

湖うみや静しずけきオンタリオ。

× Goat Island.

○ Three sisters Islands.

△ Aureolei.



川 千 島

英領加奈陀と合衆國との境界は由來、天然の勝景と歴史上の古跡に富めり、ナイヤガラの激潭、疲れてオンタリオの湖水に憩ひ、更に注ぎてセント、ローレンスの大河となるの邊、大小の嶋嶼三々また伍々、その數實に七百有餘、名けてサウサンド、アイラレズ（千島）といふ。明治三十三年七月墨西哥より南米に赴く途次、紐育市に船待の閑を得て、清遊をナイヤガラの幽地に試み、川千島の仙境を訪ひ、セント、ローレンス河を下りて加奈陀のモントリオール市に到る「ナイヤガラの瀑布」と「川千島」とは則ちこの旅行の追憶によりて成れるもの、讀者と共に再び幽界の仙とならむ乎。

川千嶋

(The Thousand Islands.)

水ねむるオンタリオの湖

みなみ北、船ゆきちがひ

ひがし西、風はさはやか。

水は覺むセント、ローレンス

しごやかにさゝ波立て、

ものうげに行衛ながめて。

英佛の盛衰をかたる

古跡の舊都キングストーン

を白き石の館ならび

塔高し「セント、メリー」の寺院。

旭日かゞやく景色をば
後に殘して權とりて水の鏡を砕きつゝ、
漕ぎ行く先は「園の島。」

やがて見ゆ「狼の島」

名には似てさてもうつくし
綠なす島々の女王。

右に見て舟をくだせば

そのむかしロリングの艦隊
なやませし「迷ひの水路。」

迷圖の中に乗り入れば

水にわかるゝ島小嶋

島にせかるゝ水と水、
水中の地か、地中の水か。

いづくに水は流るらむ
 東に行くか西するか
 入り来し水路は島に消ね
 さして行く方に『ハウの島』

左にはみどりの林
 枝なす風の音ならで
 洋琴一曲誰がすさみにや。

右みれば岩簗ね立ち
 水近き楓の枝に
 栗鼠一つ見わつ隠れつ。

自由の政治夢みつゝ

新大陸の朝風に

ビル、ジョンソンのさらす身は
 汚名にしぼむ、あはれ、朝敵。

むすめケートの孝心に
 島より島に漕がれつゝ
 かくれ渡りし物がたり
 島に聞けや、水に問へや。

湖水か灘か入江か
 わが舟は風のまにくゝ
 たゞよへりかなたこなた。

手をやすめ水にまかせて
船やれば小嶼のらげに
寄り添ひつ、何を語るか。

芝生後部うしろに延びわたる
前なる島に漕ぎ行けば
此方に暗き櫛の森
かなたに白き家の屋根。

見とれてやがて驚きて
やさしき鈴の音をたて、
小山羊は草の丘をかこねて
跳ねて逃げ行く可笑をかさよ。

岸と見し島のほとりに
魚を釣る翁おきなの面立
仙人はまこと世に在り。

籠かごまもる童わらわの笑顔
満足と自由よそに肥こねて
下界よみにも天あまつ使つかあり。

島とあやしむ川の岸
葦あしの葉はかげに鳥とりいこひ
野邊のべに草くさ苺いもる歌うたきこゆ
牝牛めぎうの遠音とんね打ち交まじわ。

入江ならむと舟やれば
 近づくまゝに島退きて
 前にひろがる水の原
 水天髣髴陸遠し。

松しげる島は繪のごと
 船の帆は風を姪みて
 泳ぎ行く鷗ども見ゆ。

小き嶼はなれぐに
 打ちもらす自然のわくぼ
 かいやける水の面に。

『砥石島』をば中間にして
 乾に見はるガナノツク
 巽に睨むクレートン
 此處より入れと人を俟ち、

『ウエレスレー』島の砂清く
 石細かなる磯部には
 浅き水をば友侶として
 遊ぶ幼兒打ち笑ふ。

アレキサンドリヤの入江
 ウエストミンスターそのの公園
 ウォータールーの小湖。

木はうなづき草は招き

高樓水に脚を洗ひ

描き出す『パノラマ』一輻。

仙女を乗せて船はしり

右の櫂には白銀の

左の櫂には黄金色の

水の滴を珠玉として、

金蛇うしろに長く延び

眞珠の鱗目をうばひ

中に奏づる笛の音は

美妙の調に耳を抜く。

人なきに立ちのぼる煙

あぶるか獲物の鮮魚

薫するか神秘の浄香。

風なきに襲ひ来る幽香

草と木の靈ある呼吸か

澄む水の妙なる精か。

上を仰げば空青く

ちぎれぐの白雲は

さながら島と散りはわて

影畫にうつす川千島。

俯、し、て、の、ぞ、め、ば、水、碧、く、
底、の、底、よ、り、遍、照、の、
光、明、を、放、つ、日、は、さ、わ、て、
川、に、う、つ、せ、る、天、空、の、影、。

水、天、相、映、じ、相、通、じ、
天、の、神、魂、水、に、下、り、
水、の、靈、氣、天、に、の、ぼ、る、。

け、だ、か、き、哉、こ、の、山、水、
う、る、は、し、き、哉、天、使、の、別、莊、
聖、き、哉、神、々、の、底、園、。

中、空、に、吐、く、瀛、船、の、煙、は、
神、龍、島、を、護、る、が、如、く、
水、に、起、す、高、き、波、は、
水、神、の、笑、を、洩、す、に、似、た、り、。

草、木、の、影、巖、の、影、
大、厦、の、影、島、の、影、
曲、折、の、變、化、出、没、の、妙、
波、に、つ、れ、て、ゆ、ら、れ、動、く、

夕、陽、は、天、空、と、水、と、を、
か、ら、紅、に、染、め、別、け、て、
森、羅、萬、象、の、物、色、を、か、へ、。

月は温和なる光氣に
この聖境を隈なく照らして、
萬有に白金の光輝を與ふ。

富貴の荒野、名譽の森
煩惱の濁流、權勢の峯
岸を境界に離隔たる
こゝ神仙の一淨土

俗界遠くかくはなれ
俗塵はるかに拂はせて
夏は涼しき風かほり
冬は白雪清淨を競ふ。

こゝに在り、自然の美と静
こゝに聞く、水の詩と歌
こゝに見る造化の精巧。

天に近し、バベルの高塔より
罪に遠し、シオンの山より
汚濁なき勝地靈境。

胸くもらするさまぐの
雲霧はらす結願に
四方の國人詣で來て
靈驗しるき一番札所。

心をやつす順禮の

數は年ごとまさりつゝ

夏は忘るゝ身の暑さ

冬は風流みやびの假すまる。

自然に接すれば自然にかへり

美に對すれば慾をすて

靜に感ずれば邪念消ゆ。

靈地にある我は無我、

仙境にあるわれは仙、

幽界にある、われは聖。

かすむ琵琶湖の竹生島

月に見渡す瀬戸の海

異郷に在る身忘れつゝ

賞むる心の涼しさよ。

縮めて寫す千島瀨

川に宿かる陸奥むちのくにの

松島訪へば旅の身も

胸晴れわたる楽しさよ。

水ねむる川千島

松風の兒守歌聞きて

大島小嶼に枕して。

水は覺むセント、ローレンス
 逝くはこの世の嚴律とて
 勇ましく下流ながめつ。

失せぬ

手籠の中に花いれて
 野邊に残して畔つたふ
 乙女のを追ふたれば
 手籠とともに花うせぬ、

こゝろをこめしわが戀は
 あはれはかなく失せたれば
 心もうせぬもろともに、
 希望も失せぬ、もろともに。

籠の内外

出るに^で出られぬ籠の中
 入るに^で入られぬ籠の外
 うらめし、細籤^{ひご}に身を寄せて
 かたる小島の聲きけば……

小き身をばふるはせて

籠の小鳥のなげくやう――

『飢餓^{うへ}と寒^{ひや}さと鷲鷹^{わしたか}の

恐怖^{おそれ}は胸にもたねども

自由^{きま}にならぬ籠の鳥

春秋^{はるあき}來れど花はなく

枝より枝に木より木に

友どうちつれ飛びかよふ

時をば戀ひて血になげど

つれなき人の心なさ

なく音、樂しとほめて聞く

くるしき籠をぬけ出で、

汝^なれと契らむ願すら

あはれ、かなはぬ身の因果。』

小さいつばさ動かして

外なる鳥のかこつやう――

『そこに焦る、身もあはれ
翔けらむ空は高けれど』

わたらむ森はひろけれど

廣き世界も友なくば

寂し、ちいさし、いと狭し、

戀しき友よ、汝が籠も

ふたり嬉しく棲まむには

エデンの園の幸福あらむ

忍び入りたや、汝が側に

千々に思は碎けども

もごかし、憎し、籠の戸は

出入かなはぬ身の關所。』

忍びて待てや、二羽の鳥

時節くるまで、つらくとも、

さらばふたりは世をはれて

比翼の鳥となるを得む。

神よ異郷に
死なしめよ

たれかは思ひうかべざる
 櫻にほふ日の本の
 春の景色を外國さうくにに
 鳥も古巢ふるねにつくものを、
 されど創痕きづもつ心には
 さすがに苦し家庭いへもなき
 故國にむかし忍ばむは、
 神よ異郷に死なしめよ。

たれかは思ひかへさざる
 青葉に榮ふ日の本の
 夏の朝をとづくに
 魚もわが藻もは知るものを、
 されども痛むころには
 さすがうらめし故郷に
 涙とともに朽ちなむは、
 神よ異郷に死なしめよ。

たれかは思ひ起さざる
 月に冴^さへ行く日の本の
 秋の夕をこづくに
 妻戀ふ鹿もあるものを、
 されど搏^{つか}たれしころには
 さすがにつらし過去^{すきこし}の
 幸なき戀をかこたむは、
 神よ異郷に死なしめよ。

たれかは夢に慕はざる
 雪にかゝやく日の本の
 富士の高嶺^{たかね}のゆかしさを、
 雲も情のなくてやは、
 されども病^びめるころには
 さすがにあはれからき世の
 つれなき嵐うらみむは
 神よ異郷に死なしめよ。

友なる山は忘れられで
 閉ざす眼まなこにうつれども
 親しき谿の川水は
 今なほ耳に響けども
 かなし、心の友垣の
 破れしさまをいかで見む
 荒れにしあとをいかで見む、
 神よ異郷に死なしめよ。

君主きみ思はぬにあらねども
 國土くに忘るゝにあらねども
 さらでも乾くいとまなき
 涙の袖を故郷の
 山見るたびにぬらしなば
 川聞くたびにしほりなば
 心やぶれて血や出でむ
 神よ異郷に死なしめよ。

デスカルソス公園

(Alameda de Los Descalzos)

×リマツク河の水の音は

轟く馬車の響に埋れ

遠く太平洋を睨み立てる

○サン、クリストーバルの峯の靄

かゝれるまゝ、夜は鐘聲と

ともに消え果てデスカルソスの

公園の朝は景色ぞよゝ。

△コバカバナの街はつきて

敷石ならぶ公園の入口

門の扉人をぞ待つ

詩卷脇ばさみさまよひ入れば

帚の引目なほ、あざやかに

印せる足痕そもや何人?

そらも清く地も新し。

右とひだり鐵柵にそひ

植ねたる花の種類やくさぐ

緑きそふ樹の根に媚び

雲をよぶ枝、風招く幹、

巨人の手、美人の舌

むらさき匂ひくればなる薫り

秀美をほこるわれら見よこ。

月數になぞらふ十二の像
 かたちしづかに雪をあざむき
 花にや酔ふ、風にや笑む
 蜜に渴ける、●蜂雀飛むで
 羽に奏ぶ神代の樂、
 木梢の駒鳥は節曲面白く
 うたひはじむ樂天の歌。

大理石の腰掛に置く
 露の涙は誰が流しけむ
 葉は鋭き蘭のつるぎの山
 つくる此方に不思議の泉水
 鯨や棲む、龍やひそむ
 老樹の枝を呑むらむごとく
 水ぞ噴ける、音もすごとく。

昇るは水、落つるは雨
 波紋消えては泉水にかへり
 霧と飛ぶは天空に急ぐ
 檜の落葉の小舟や、あはれ
 浪にもまれ潮にゆられ
 やがては底に魚をあざむく
 水に聞けや、無常の詩。

微風花の香を送れば
 噴水よ、つれなし、顔をそむけて、
 うしろに寄り、風かへれば
 まへに屈みて『否』と首ふる
 戀に病みてなやむ友よ、
 この劇見てこころ清めよ、
 水は澄めり、風はすいし。

× Rimac. ○ San Cristobal.

△ Copacabana. ● Humming bird.

大和撫子

はるく外國にうつされて
 苔に媚のいろ見する
 大和なでしこ心せよ。

ゆかしき汝れが姿には
 蝶も日暮を忘るらむ、
 夜半には露も訪ひ來らむ。

老樹につらき風すらも
 なれにはわざと笑顔して
 しづかに肩を叩くらむ。

風になびくは女郎花
 露をぞ慕へ朝顔は
 蝶をぞ愛づれ菜の花は。

さはれ、撫子、こゝろせよ、
 よしなき人に手折られて、
 朽ちむはをしき汝が姿。

朝日に匂ふやま櫻
 花を心のもののふの
 汝れ戀ふ真情忘れずば、

仇なる胸部に飾られて
 榮華の夢に酔はずとも
 あはれ憂き目に萎れずも、

ますらをのこの頭のべに
 大和なでして咲きほこれ
 皇國のほまれ匂はせて。

塵塚

里馬^{リマ}のみやこの片ほとり
 リマツク川の北の岸
 アンコン線の鐵橋の
 かなたに高く聳ゆる立ち
 野邊の景色を遮ぎるは
 積もる塵もてつける山。
 朝な夕なに瘦馬を
 聲あらかに罵りつ
 車に土の煙たて、
 運び棄てたる塵芥
 棄つれば拾ふ世のならひ
 塵も生命の種なりき。

虫のかづくあげすとも
 いやしき鳥はいはずとも
 主なき野犬四つ五つ
 腐肉に饑^{うぶ}をうちしのぎ
 親なき子ども三人ほど
 屑を拾ひて身にまどふ。
 みやこの人のかづくが
 日ごとにつくる塵芥
 かきたて見なばさまぐくの
 世のありさまを語るべく
 をかしきものも、かなしきも
 よきもあしきもまじらむ。

洋燈ラムアの碎片かけは下婢はしたらの

物思ふ手にすべりけむ、

皿しるべは下僕しもべの疔癩しんげいに

ふれて最後をとげにけむ、

首をぬかれし手筈は

夫婦喧嘩の名残にて。

兒を育てけむ牛乳ちゅうにゅうの罐、

管や卷かせし酒の瓶、

盲目をかくつ錠もあり、

聾をくやむ鍵もあり、

ちむばの腰掛、手なき匙、

底なき「バケツ」の由來いかに

腰のぬけたる人形は

破れし靴を枕とし

窓をうがてる靴足袋くつたびは

袖なき「シャツ」のふどころに

ひしやげ帽子を船として

こゝろ安けくうちねむる。

一寸五分の折れ小櫛

あはれその齒はかけたれど

むかし乙女の黒髪に

榮華の夢をはこりけむ、

さては老嫗おきなの白髪に

時の非なるをかこちけむ。

讀まれしおとは物包む
 身とれちぶれし新聞紙
 言論自由の聲もなく、
 雑誌荒ぎもをぬかれて
 むなしく長大息す
 顔にらく書きされしまゝ、

文字をいだける紙の細片きれ
 讀むすべもなき身の果や
 詩人名句の成らざるを
 いかりてかくはちぎりけむ、
 破れし戀をうらみつゝ、
 艶書ふみはにくしと裂きにけむ。

ここわけ問ふて書かむには
 一つの塵ちりほこに一卷の
 歴史あるらむ、世の人も
 もとは塵よりつくられて
 塵ちりほこつむ爲めに働きて
 塵と打ち行くおはれ身ぞ。

されば拙きわが詩もて
 塵の歴史を記さむは
 またもや塵の塚肥やす
 種まくのみと悟りては
 さても益なし、紙も塵
 筆も塵なり、われも塵。

白薔薇

詩卷の朶しらばらひさだに白薔薇一枝

まだうせやらぬかほり清らに
みまもるたびに心迷ひつ
思ひぞ起すありし日のこと。

蝶舞ひ鳥うたふ彌生のなかば

乙女の父の招持まねぎをうけて

一家團樂のかづに加はり

饗應もてなされぬる樂しきその日。

さそふわが腕にいとゞしづかに

乙女は手をばかけて語りぬ、

席につくごとて廊下をたどる

二人のこゝろ戀にひかれて。

食卓つくはかこみてならべる椅子に

乙女はかなた、われは此方に

二人が中間なかを憎くやへだつか

一枚の板、一個の花瓶。

さはれ眼に見る生命ある花

二八のつぼみかすかに笑むを

耳には聞くよ、玉をころばす

美はしの音ねの花にひやくを。

見よ、雪の肌、かゝやくまなこ
 白き撞衣ぶつかひも色やなからむ、
 しろがねの匙さし、さては肉刀にくきり
 朝日のまへの月にたどへむ。

皿かづつくす山海の美味
 あるひは語りあるひは笑ひ
 和氣堂に滿つ人界の春
 春の女王はわが意中の人。

乙女は口に戀かたらねど
 花の蔭よりわれに語るよ、
 千變萬化の眼の暗號まろご、
 こゝろに緋ひもこくわが戀の暗號字典コード。

會食つごひは果てつ、いざ行かばやと
 父なる人のつげけるときよ、
 『しばし』とどめて花の乙女の
 前なる瓶かぶの花を見やりぬ。

數あるなかの白薔薇一枝
 ちぎりてわれにいざとてくれぬ、
 『人目もあればこのまゝ君に
 口吻くちつけず』と言はまほしげに。

言葉はなくもこの美花うまはなに
 こめし乙女のやさしき思ひ
 讀めでやは、花、悟らでや、戀、
 戀は人間の花、花は自然の戀。

勳章得たらむ軍人のごと

こゝろ勇みて胸にかざりつ

家にかへりて艶書をかくとて

詩集ひろげてこゝにはさみぬ。

いとしき乙女の手にならまれて

その名＊にちなむこの花なれば

ゆかしき乙女の思ひをこめて

われにをくりしこの花なれば、

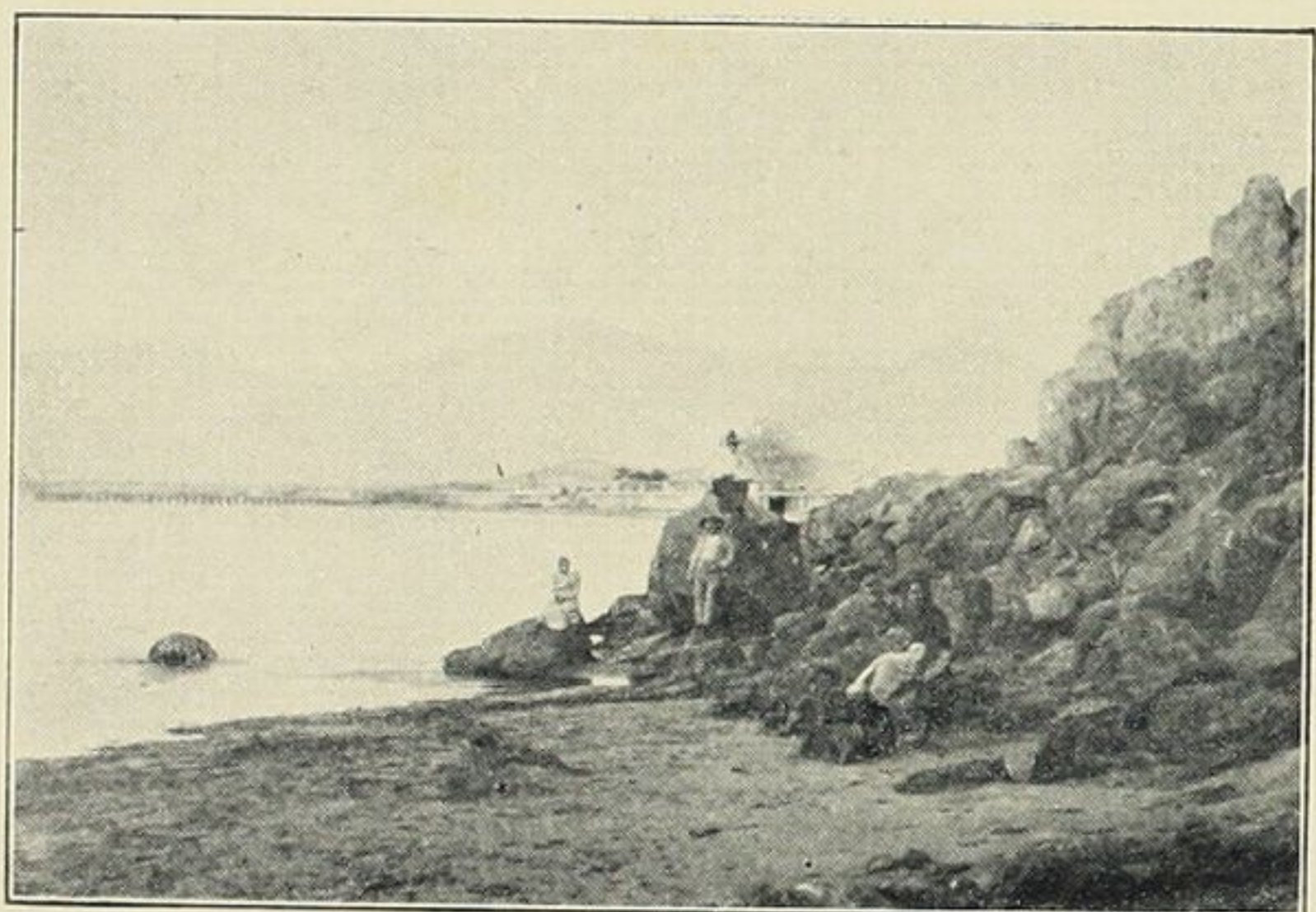
思ひぞ起すありし日のこと

みまもるたびに心迷ひつ

まだうせやらぬかほり清らに

詩卷の朶も白薔薇一枝。

* Rosa



アンコン

(Ancón)

アンコンは秘露國の小港にして首府里馬を距る約十里のところにあり、瀛車にて一時間あまりの行程をす。前には渺々たる太平洋の水を控へ後には砂原漠々として丘陵その間に起伏す。飲用水に乏しく、草木青々たるの美觀なし。雖も海濱砂細かにして、貝殻光を争ひ、夏時は海水浴場として紳士淑女競つて來集す。千八百八十三年十月二十二日智利國との媾和條約を締結したるの地なり。

涼しき風に頬をうたせ
 ふかき思ひに沈みつゝ
 匂ふ藻草ふみゆけば
 砂のとりでに身をかくす
 怯ぢたる蟹の目ざとくも
 こゝアンコンの磯の邊に。

千鳥のかける砂の文字
 よみつゝなほもさまよへば
 履むで碎くる貝がらの
 あはれやさしさその音に
 驚き飛びぬガイナツ蠻鳥は
 こゝアンコン磯の邊に。

根をみちしほにあらはせて
 鳥に宿かす岩の上に
 腰うちかけつ見渡せば
 木もなき小嶼二つ三つ
 浪にもまれてさけぶかな、
 こゝアンコンの沖あひに。
 砂につらなる大洋の水
 水にとなれる砂の原
 山と聳ゆるそがもとに
 畫ける人家はかすみつゝ
 夕日は棧橋に暇告ぐ
 こゝアンコンの湊うち。

やよ待て、夕日、急がずも
なれに日暮はあるまじを
光線の羽にわが妹を
戀ふるまことの一滴

のせて行けかし日の本に
こゝアンコンの湊より。

思ひはふかし海よりも

願はきよし空よりも

この太平洋よしや廣くとも

一つにかたきこゝろをば

二つにさかむよしやある

こゝアンコンにあればとて。

(幻夢)その紅の頬をむけよ、
その手にわれを抱かずや、
うれしさゆへに涙もつ
その眼に口をつけさせよ、
不思議になれにめぐり逢ふ、
こゝアンコンの磯邊にて。

いだくとすれば影きわて
寄せくる浪の音くらし。
人家の燈火たごりつゝ
またもや貝をふみくだき
靴に砂をばみだし行く
こゝアンコンの磯の邊を。

俗語雅想

三十一字の歌をよみ
漢字ならべて詩をつくる
學者の豪さ、有難さ、
衆人の使はぬことば知り、
衆人に用なき字まで書く。

紀の貫之に見せるなら
唐の李白に讀ますなら
歌はむかしの『ことのは』で
詩は平仄に韻押して
作るが如何さま御尤。

しかし思想をあかすには
世の有様を寫すには
なみの言葉でたれにでも
通辨いらすに解る様に
ひらたい歌をよむが道。

『泥棒』するの『物とる』も
『誹謗』するの『そしる』のも
言葉はちがへ同じ意義、
俗語を俗とは今もなほ、
むかしになづむうつけ沙汰。

夢を叩くは無風流
詩歌を寢言にうなられよ、
俗語の歌は兎や角と
批難御無用、たはこゝろに
眞面目な應答も興が無い。

『やまとことば』は不充分
漢語、梵語をこきませて
洋語も入れたこの俗語、
つねづねはなす日本語、
千變萬化、自由自在。

文字にうつして書けば文章、
曲節に合はせて歌へば詩歌、
可愛い娘の耳に口、
ひそ／＼話せば戀の橋、
かゝる涙に身も濡れる。

やさしい、ゆかしい日本語、
詩人の妙想、珠玉として、
飾つて舞臺に伴れ出して、
扇持たせて舞はせたら、
聲はうぐひす、梅の花。

西
詩

詩歌は國風なり。また、國語の花なり。吟ずべく誦すべくして而かも譯すべきものにあらず。譯せば即ち其の生氣と妙味を失ふと、猶ほ梅が枝を折りて花瓶に生けるが如し。由來外國語の詩歌を翻譯するほど勞効相償はざるものあらざるなり。

以下掲出する譯詩は譯者の特殊なる經歷と境遇に基きて而かも可成短きものを選びたるなれば、歐米詩人の本領を紹介する上には寸毫の價値なきを信ず。たゞ折角譯したるものなれば出來不來に拘らず反古籠に投げ入れむことの流石に心ならず終にこゝに詩集の一隅を割愛したるのみ。謹むで先進大家の叱正を請はむ。

想夫戀

愛蘭 トーマス、ムーア

(一七七九、一八五二年)

思ひをかけしうら若き
 ますらをのこが永久に
 眠れる故國はへだゝりて
 ためいきながらうちつごふ
 若き友には目もふれず
 顔をそむけてよゝと泣く
 ゆかしき情人の墳墓に
 はるかに心かよはせつ。

生れし鄙^{ひな}邑^なのかざりなき
 歌のふしぶしますすらをが
 眠らでとももありしころ
 めでし紀^{かたみ}念^みをうたへごも
 曲^か調^しのみ賞^あめて聞^きく人の
 心^こなきこそあはれなれ
 思^{おも}ひやらずや歌^うたふ身の
 胸^{むね}はりさけむ悲^{かな}しさを。

戀^{こひ}に生きけるますらをぞ
 國^{くに}家の爲^{ため}とて死^しにけるぞ、
 戀^{こひ}愛^{あい}と國^{くに}家^かとはますらをの
 生^{いのち}涯^ちの繩^{なは}をよりぬるを
 國^{くに}のそゝがむ涙^{なみだ}雨^{あめ}
 晴^はるゝ其^{その}の日^ひの近^{ちか}くてや、
 かれにこがるゝ戀^{こひ}女^{むすめ}の
 慕^{こぼ}ひ行く日^ひの遠^{とほ}くてや。

ア、日の光線、光榮ある
 朝をまたと契るとき
 光線の憇ふ山の邊に
 戀女の墳墓きづかせよ、
 西方より來らむ微笑のごと
 悲しき故島の彼方より
 永久に眠れる戀女の
 上に光線はかゝやかむ。

いざさらば

英國　バイロン（一七八八年）

かぎりなき世の末かけて
 別るゝならばどこしへに
 わかれもせむ、いざ、さらば！
 ゆるすにかたき心とて
 背くべしやはいかで汝に。

かなしむかしと過ぎさりて
 汝にまたと來るまじき
 清きねむりに擒はれて
 なれがかしらを幾そたび
 もたせし胸を開きなば、

なが見つめけるその胸の
底の思ひを残りなく
示し得むにはあな無情！
汝れは知るらむ無慘にも
蹶りて棄てぬる罪のほど。

よしや浮世の人々は
なれが行爲を褒めもせよ
搏たれしわれを笑ふとも
惱めるひと基礎として
ほむることば、汝を責めむ。

この身を蔽ふ過失の
數はさすがにしげくとも
癒ぬぬ深創を負はず手を
外には、あはれ、見ざりしか
われを抱きし手にあらぬ。

さはれ、ア、あはれ汝は
自己あざむくことなかれ
戀は消に行くものながら
刹那にかくも引き裂かれ
果つべきものにあらざるを。

なれが心はいまもなほ
生命をさゝわわが胸の
血潮ながらに呼吸つきて
死なぬ思念はそも、かくぞ
二人は逢へぬ、苦し、身ぞ。

死をなげく泣聲よりも
いよゝかなしきことばぞや
二人は生きむ、さりながら
朝は日ごとふたりをば
配偶者なき床にさますらむ。

汝、慰籍をあさるとき
ふたりがなかの愛兒、早や、
物いひそむる目とならば
『父』といふ名を教ゆるか？
父につかれぬ兒ながらも。

愛兒の小さき手をなれに
押しあてむときいとし兒の
唇頭をば唇頭に吻けむとき、
責めては思へ汝がために
祝福いのるこの身をば。

いとし愛兒の面ざしの
まこと見られぬ面影に
似よりてあらばさすが汝が
心もどけてやはらかに
わが身あはれと思ふらむ。

わが過失はなべてみな、
なれや知るらむ、わが狂は
知る人絶えてあらざらむ。
萎れながらもわが希望
汝が指すかたぞ慕ひ行く。

感情はなべて打ち震ひ
世には屈まぬ傲慢すら
汝れが前にはかゝめども
汝は棄てぬるを何とせむ、
早や我が靈魂もこばめるを。

事終りぬ——言葉益なし
さらに甲斐なきわが言葉
さはれ手綱に止めがたき
思ひはまたも狂ひ出て
心ともなくかけり行く。

いざさらば！汝れ知るごとく
 生きわかれねにしはたゝれ
 心は枯れつたゞひとり
 うち萎れ行くわが身なり、
 このうへ死なむよすがなき。

一去一來

西班牙 ホセー、デ、セルガス
 (一八三三、一八七二年)

うつり行く世より世に
 さだまれるおきて嚴律とて
 人しばる大秘密
 人は來つ人はゆく。

ゆくものも……來るものも
 同じ苦ぞ胸にもて、
 死ぬものは去りぬとて
 生くものは残るとて。

生きむため人はみな
 あらむかぎりつとむれど
 ゆくものはかへり來ず、
 來たるものやがて行く。

反對のことなるに

ためいきす、かれもこれも、
 生きたるは死をなげき、
 死にたるは死をば見て。

人世てふものにこそ

暗き秘密ひそみたれ、
 來るものはなきつゝ來
 行くものもなげきゆく。

合理か習慣か、

われは得も知らねども
 うまるればよろこびし
 死ぬときはかなしみます。

からき世の生命をば

ふた道に人ぞ解く、
 來るものに長くして
 逝くものに短しと。

なげかはし心づかひ

あなくるし物れもひ
 生るゝはうまる時

死にゆくは死ぬるとき。

世のはじめありてより
人しばるおきて嚴律とて
いと深き大秘密
人は來きつ人は逝く。

題なし

西班牙　グスタフ、アドルフ、ベッケル
(一八三六、一八七〇年)

つくためいきは氣にかへり、
涙は水よ、海に行く、
さらば女をみなよ、失うせたらむ
戀はいづくに行くべきか？

睡眠ねむり

西班牙 マルティネス、デ、ラ、ロサ
 (一七八六、一八六二年)

はかなき人間の唯一の慰安なぐさめ

傷つける胸の甘き鎮痛劑、

來れ心地よき睡眠ねむりよ、來りて

疲れはてたる眼をしばらく閉こもよ。

來れ、しづかなる神靈みたまよ、來りて

そのむかしさしも樂しき戀の巢

今はかなしくもさびしきわが床こゝ

いかめしきなれが翼もて蔽へ。

平和なる汝が胸に寄りねむれば

木の葉ゆする風の音面白く、

遠き雨の黙したる響にも

れもむきこもれり、やすけき静寂。

こゝに在らぬに、眼に見、腕うでに抱く

『われ』の持主のうつくしき姿、

愛くるしき口のうまさ甘露を

心ゆくまで思ふまゝ飲まばや。

うすぐらき陰影もいむべき吐息こゝろも

妨げなすな、幸なる休息やすみ、

オ、清き睡眠ねむり、荒き荊棘いばらも

わが額のくさむらにな、潜みそ。

永別

墨國 イグナシヨ、ロドリゲス、ガルヴェーン
 (一八一六、一八四二年)

つれなき運命は汝を見ざらしむ、
 乙女よ、われ、いま、汝を失はむとす、
 他人わがたからを弄ばむあいだ
 われはいさふっき、なげきに沈まむ。

いさうるはしき汝れがその容顔も
 雪なすうなじもふたゝび見ざらむ、
 かゝやける汝が眼、起居とふるまひ
 見まじよ、またこは、汝が聲も聞かじ。

わが血の管をばもやせし汝が聲
 わが熱き思ひを煽ふりしなが聲、
 こゝろ迷はする汝がその微笑
 いかにこの身をば狂はせたりしよ。

ふたごゝろの友なれに近づきて
 みまもりつ媚びつ、よろこばむあいだ
 あはれなり、われは、火のごと猛りて
 憎みと怒りに身は溶くるおもひ。

さはいへ、ゆるせや、なれ、たうまき乙女、
 神々しき乙女よ、わがつみをゆるせ、
 つれなくわが戀、よし、いやしむとも
 胸にはかはらず、汝れをこそ慕へ。

わが口は汝れが、愛らしき名をよび
 オシヤンの琴のごと、わが耳にひびく、
 思ひうかぶるよ、やさし、汝が聲音
 苦しめるわれに、慰籍あたへて。

オ、ゆがしのローラ、なれが面影は
 永久にあらむ、胸に彫られて、
 世にもいまはしき仇なる思ひも
 いはらぬ眞情を消さむによしなく。

さはれ、さまたげじ、卿等の幸福は、
 禍なかれ、二人がうへには、
 きらはれし我れは、棄てられしわれは、
 かなしみに朽ちむ、さらば、ローラさらば！

涙一滴

墨國 アントニヨ、ブラサ
 (一八三三、一八八二年)

(一)

なれを拜みぬ、神をあがむる
 天つ使の心をもちて、
 女よ、なれはエデンの園に
 咲けるゆかしき百合の花にて。

なれは東にかやける星
 ひかりもてわが天空をばてらし
 神の額のごと聖くして
 わが夢に見る聖女なりける。

なれは嶮しき道のほとりに
くさむら深く見出されし花、
戀は急ぎぬそのむらさきの
花盃の甘露に心迷ひつ。

汝はわが靈魂のけだかき薫香
日光のごとく汝は我れを射つ
汝は我が戀の聖き信念
またわが救拯なりき、女よ。

なれは宇宙をかやく色の
三稜玻璃にうつして見せつ
なれが側にわれは夢みぬ、
光明と花と透けるエデンを。

戀には逆上せ、思ひに狂ひ
なれが姿を夢みて酔ひつ
靈魂の眼に天空つかさざる
月のごと清き汝れを見上げぬ。

(二)

思ひ出さずや膝をかゝめて
ひたひと額ちかく打ち寄せ
汝がくれなるのくちびるの接吻
うけつゝ、やをら、いづみにうつる
月の姿を汝が聖き眼に
うつさばやとて月見上げしを。

戀の奥殿ふかくわけ入り
 こゝろは迷ひ天つ使の
 なが面影はやつれたりしを……
 なれは匂へるげに花なれや
 われは花盃に生命そゝぎぬ。

(三)

されど幻影消れて跡なく
 花もろともに刺生ひたちて
 人殺ろす毒一滴落ち
 快樂の杯苦味を帯びぬ。

精神酔はするをかしき夢は
 覺めて遠退く、あはれかげらふ、
 一たびこゝろまごはすあとに
 遺すは癒ぬ永久の創。

かくも恐ろし男子の歴史、
 かくもはかなし、一時の幸福
 浮世の光榮前に押し立て
 ひそに攻め寄る苦き苦惱。

さればこゝろは希望たねはて
 かなしく夢とともに亡びつ
 なれは身を刺す苦痛の晁
 わがこゝろにと着せぬ、女よ。

なれが碎きし、かなし、心は
 枯れて 葬の床に打ふし
 なが戀これに面巾をかけて
 そが灰汝れに祭壇を築く。

秘密のかくす幸福の後部に
 悪魔は陰影とつきまとひ來て
 天をかなしみの墓とぞ毀つ
 知らずや、女、これや運命。

あれを限り

墨國 フワン、デ、ディオス、ベサ

わが唇頭なれがくちにふれぬる
 かの時のこと思ひても見よ、
 雲一片に星ひとつづゝ、
 一花ごとに螢火ひとつ
 うるはしかりける静けさかの夜。

顔あからめつ耻かはしげに
 わが身にひたと汝はよりそひて
 聲ひそやかに、さもひそやかに
 汝が靈魂の言の葉のかづ
 われのみにとて語り聞かせぬ。

かくてぞ二人戀ひつ戀はれし
 樂しきむかし忘ればやとの
 願もむなし汝が手もてわが
 心の底に書き残しぬる
 書を消すべきすべもあらぬを。

花のひと枝、春の太陽ひとつ！
 わが思みな開ける花の

なかに秘めよとなが靈魂は
 熱き戀慕の暖氣もて

かの夜こゝろに花を咲かせぬ。

いとも苦しきこゝろ弱さに
 なれは降りつ身をばふるはせ
 かなしみもだへ顔色あせつ
 眼にはなげきを湛へしすがた
 いかで忘れむ忘るべしやは。

苦痛しのび支ふらむ如く
 悲哀しのび隠すらむごとく
 顔をもたげてわれを見上げつ
 かくて聞かせぬかなしき告別
 いかで忘れむ忘るべしやは。

これや虚偽いつはりの眞まことの本躰さまの
 ありのまゝなる寫生いきうつしなれ、
 心の夢をさつと吹き消す
 たとは、陰影かげか逢はねば冷ゆる
 仇なる戀の正体やこれ。

眼のまへ近く行末の幸福
 心の平靜やほらふたり、見ながら
 別るゝとはア、これ何事ぞ
 いかになしくわが靈魂に
 響きたりしよ『告別』の一語！

一つになりしあはれ生命を
 もとの二つに裂き離さむは！
 生命の眞髓むしり取らむは
 離隔はあたふ、生命の陰雲
 忘失は備ふ生命の墳墓。

人間には解せぬ運命うむいの書
 幸福なかりけむ二人が書は、
 戀ひつ戀はれし果てや苦惱
 過去には結ぶひとつたましぬ
 將來には分つつらし、二つに。

汝れが告別のたゞ一ことば
 聞くわがこゝろはや痛ませて
 告げむ言葉もあらず啞者の
 無言！最後のこれや挨拶
 まことは會へぬ身をなげきつゝ。

汝を聞きしわれ、何となりしぞ？
 告ぐるを聞けや、さもにがき苦惱
 心に捺され今も残ると
 愛の接吻に、胸かきむしる
 告別の言葉添ふをうらむと！

汝が嬌趣に目は迷ひつゝ、
 見合ふ二人が身はさながら
 聖き火ながら星ながら
 また逢はざらむ名残をしみて
 かたみに深く熟視る悲しさ！

胸の思ひは露消わなくに
 無慘！二人をいま別つとて
 かの『瞬間』の飛び來し時よ、
 一句、一言、むせかへる聲
 つくためいきは悲哀の調。

二つの靈魂のあひしところに
 あはれ一つを暗に残して
 歸り行く汝が、姿見やりぬ……
 いまし、まことにわれ戀はゞ
 なご永久に別辭告げしぞ？

定義

秘露 リカルド、バルマ

あはれ思ひの捕虜なる
 碧き眼の乙女は
 心動くか、やさしげに

詩人に問ふていひけらく――

『詩人よ、戀の秘密をば

残らず説きて明かに

示しをはりぬ、請ふらくは

告げよ何もの、涙とは』。

『涙といふは眞珠にて

人の心と呼びなせる

深き海邊に苦痛は

あさり行くなり、こゝかしこ』。

對話。

ヴェネスエラ國 アンドレース、ペーヨ
 (一七八〇年一八?年)

ティルシ

『汝れに戀せむ願望はあれど……』

クロリ女

『何故に戀せぬ?』

ティルシ

『告て欲きか、その理由を?』

クロリ女

『聞きたく無くて……』

ティルシ

『さばれ汝れ、もし、腹立てむには……』

クロリ女

『何いかるべき』。

ティルシ

『よし／＼さらば、語り聞せむ』。

クロリ女

『告げませ、聞かむ』。

ティルシ

『汝れに戀せむ願望はあれど、

クロリ女

『汝れに誓ひぬ、幾世わらぬ』

ティルシ

『過ぐる日曜日他に戀人に、

クロリ女

『汝れは誓ひぬ、幾世わらぬ』

クロリ女

『そは事もなし、ならば君にも、

クロリ女

『そは事もなし、立てて見せばや』。

不老泉。

獨逸 シルレル (一七五九年
一八〇五年)

疑ふなかれ一場の虚誕と、
不老の泉はまこと湧き出づ、
永久に湧き出づ、問ふ、何處に、
詩人の妙なる、技能のなかに。

マドリン、

佛國 ヴィクトル、ユーゴー
(一八〇二、一八八五年)

あゝ、マドリン、聞けや、聞けや、
野は氷に、閉ざす冬の
捕獲品、返へし果てぬ。
われとともに森に歩め
獵笛の音たごりたごり
徒者等いそぐ、その森に。

来よ、マドリン、けだかき呼吸
ふりかけつゝ花に匂ふ、
やどす春は今宵なれを

慰めむと前垂より

雨のごとくばらを降らせ
刺ある樹をかざるにせよ。

あゝマドリン、わが身、もしや、
やさしき汝が手をば慕ふ

眞白き毛の羔こひつじなら、

さては、汝れが澄める聲に

こゝろ迷ひ道もあらぬ

天空そらを下りて來る鳥なら。

あゝマドリンわが身、もしや

葡萄の下もの靜かに

聖き岩の洞に住まひ

汝が昨夕ゆうべのつみの讖誨ごまひ

眞情より告ぐるを聞く、

浮世すてし聖僧ひじりならば。

あゝマドリン、もしわが身に

いそがはしき夜の蝶の

頭にかゝやけるごとき

するごとく見つむる眼あらば、

汝なはふしごに蝶の羽は

窓の硝子、撃たむものを、

あゝ、マドリン、汝が身は早や、

「レース」「コルセー」纏ひもせで

(絹も麻もみな脱ぎ棄て)

薄絹もなき無垢の無垢

見むはさすが耻かしやと

鏡の面おもて、蔽はむとき。

あゝマドリン、いまし、もしや

汝れが家に、しもべ、しもめ

數多くもはべらせ見む

願望ねがひあらば汝なが祈禱いのりの

密室むろを高く石もて築つき

帳帷とばり深くかくれたくば、

あゝマドリン、汝いましもしや

浪なみとうねりしげる髪くしに

薔薇、草の葉、かざすかはり

葉は黄金の色まばゆく

花の蒼、眞珠まゆに咲く

花環コロナのせむ心ならば、

あゝマドリン、いまし、若しや、

伯爵夫人——となりたくば

われと共に野邊のへを去れよ、

われは近そき彼地そこの貴族、

しかしそれもいやとならば

我わがを牧羊者ひつじかみとなせや。

(完)

短笛長鞭と世評

太陽の評に曰く、

「……詞足らず、調整はざる所ありといへども、游子真情の流露亦捨てがたきものあり。夫の徒に清新を衒ひて軽浮に陥るものに優る萬々なりと謂ふべし」。

國民新聞の評に曰く、

「……作者今は海外に在りて、通商事務に従ふの餘暇此編あつて、而して自費出版を試みたるなりと傳ふ。詩は、藤村泣菫と異りて、極めて穩かなる想を歌

はれたり……」。
中央新聞の評に曰く、

「……牧童とは世を忍ぶ假の名、
眞は海外に官を得し某が自ら費
を投じて去廿七年頃よりの新体
詩をぬき出だし趣味の開拓を以
つて自ら任せる美育社に托して
出版せしもの長詩短詩廿有餘
篇、智慧と力の如き蝸牛の如き、
お正月の如き純正高雅、措辭の
彫琢をもちゐらずして思ひ少しも
邪なきを見る……」。

(他は略す)

明治三十五年七月九日印刷

明治三十五年七月十二日發行

不許複製

定價金五十錢

編輯者 黒田直道

發行者 赤木久太郎
東京市麴町區三番町
二十五番地

印刷者 齋藤 裕
東京市赤坂區青山北
町一丁目一番地

印刷所 同 齋藤活版所
(電話新橋千六百七番)

發兌元 美 育 社
東京市麴町區三番町廿五番地

特約大賣捌所

東京市神田區表神保町

東京堂

東京市神田區裏神保町

上田屋

大坂市東區備後町四丁目

吉岡書店

大坂市東區南本町四丁目

文淵堂

横濱市尾上町三丁目

田沼書店

美育社設立の主旨

帝國の文明は著しく發達せり。明治の文華は實に長足の進歩をなせり。而も、其の文明はあまりに乾燥ならずや。其の文華は餘りに赤裸ならずや。見よ、我が江湖の趣味は低落し盡して、明治文華の子、其の心今や野生の蠻人に似たるものあらんぞす。

文明は現利の權化にあらず。現利の外に、文明が保有せる地域は極めて濶大也。我が社會は、一意現利を追ふに急にして、茲に此濶大なる地域あるを忘れて。濶大なる地域は何かをいふ、不肖等をして言はしむれば、其は即ち趣味也。文明の現利の外に相對せる文明の趣味也。

趣味は、現利の外に超絶す。人は、利をはなれて、能く平凡に生き得き。趣味あれば也。人は利をはなれて、能く艱苦に勞し得き。趣味あれば也。人は利をはなれて能く悲痛に堪へ得き。趣味あれば也。而かも、趣味をはなれんか、人は一日も世にある能はず。悲しむべきかな、明治の才傑、此の利を養ふに專にして、而して此の趣味の陶冶を忘れてたり。

不肖等微力をばからず、茲に美育社なるものを創設し、聊か我が美育の爲めに力を致さんとするもの、是れ一に社會が趣味の欠乏と低落を憂せざるを憂ふる甚だ多

牧童君作 沖舟君密畫

既刊

既刊

新 短 笛 集 詩 長 鞭

定價十五錢 郵稅四錢

(切品)

神に對し、自然に對し、人に對し、功對し、名に對し、戀に對し、て、包む節なく發露せる其の聲の、如何に清純にして如何に熱烈なるかよ。加之に、繪畫の如何に新趣優麗なるかよ。

東京 美 育 社 發 行

きが爲め也。不肖等、能く自らを知る。何ぞ後進鈍才の不肖等にして、世に多くを寄與するの能あるべき。されど、不肖等また能く誠意の天に通するを知る。不肖等、能ふかぎり奮進して。趣味の陶冶、普及を圖り、田圃に、道路に、家庭に、店頭に、工場に、より高くより清くより幸なる文明の影を宣傳せんと欲す。

是れを盡すの方法として、われらは先づ出版事業を取れり。此の出版に依つて、少しく所志を江湖に傳へ、而して後、また他の方法を取つて、飽くまでも趣味涵養の爲めに力を致さんとするもの、是れ我が美育社の創立主旨也。

義人よ、仁者よ、唯物主義の弊に憤れる人よ、情の人よ、希くば不肖等の野勇を笑はず、不肖等の愚を笑はず、其の微衷を擲んで幸に誘導贊助の聲を惠まれんことを。

美育社の事業は、前途尙ほ遠達也。更に希くば、近き日の行動を目して、直ちに遠き將來を速断することなからむを。われらは、敢へて茲に、是を記録するの用意を忽にするこ能はず。

明治三十四年秋

赤木久太郎 謹白
黒田直道

美育社發兌書目

●妹持てる姉は必らず讀め！

近刊

連山山人作
むすめめ伽嘶

近刊

お伽嘶といへば坊
ちやまのばかりで
嬢ちやま方のは一
向ありませぬ。はそ
いな片手打のとは
いな片手打のとは
切な連叔父さんが
今度嬢ちやま方の
爲めに、おこしらの
なすつたは此の本
です。まあ、ちよつ
と読んで御覧な
い。お話をいくつ
もあつて其の面白
い事と言つたら！

●娘持てる親は必らず買へ！

黒田湖山君作 (泰西名畫挿入)

大學攻撃

新青年小説

定價二十錢 郵税二錢

大學攻撃は、
是れ一篇の**社會小説**也。

大學攻撃は、
一篇の**教育痛**

罵論也。作者が凌々の意氣、
社會の時事に勃發して此處に此篇

成る。作者はまた是れに依つて今
の蠢々たる小説家が迷夢を打破せ

んと説く。嗟乎、痛快なる大學攻

撃は、湖山君が鋭利なる觀察と暢

達せる文致とに **青年を活**

成り、幾多の **殺して眞に自在也。**

永井荷風君作 小島冲舟君畫

新青年
小説 野 心
刊既

夜の人(附録)井上啞々君作

定價廿二錢 郵稅二錢

青春の血液は野心に依つて活動す、青年小説として茲に野心ある。豈に一本を勸めざるを得んや帝國文學評 (上略)荷風子の捕へたる所謂野心の如き確かに現代日本の進歩的國民の間に洋溢する活動の源泉たり動力たるなり。子が之を捕へ來り之を中心として種々の事象を聯結せるは(中略)近來の小説界に於ける一異色たるは疑を容れざる所總じて之を言はゞ野心の一篇兎に角に近來の一佳作たるを矢はず云々

生田葵君作 (泰西名畫挿入)

自由結婚
刊既

新青年小説

定價三十錢、郵稅四錢

此篇は才として愛の眞生命を説けるもの、而も亦明治新舊思想の衝突を描き、將に我が上流社會の今日を發露せり。葵山人の傑作、敢へて江湖の青年諸彦に勸む。

萬朝報評 (上略)當時の熱も涙もなき駄小説を抜くこと數等上にして、著者が自ら云ふ壓制なる戀人の親に呈する小説として有力なるものなり。

讀賣新聞評 (上略)行文流暢着想穩近來注目すべき好著作の一たるを失はざるべし。

有本次郎君作 (新青年小説)

女の秘密

刊近

價廿二錢 郵稅四錢

女子は一個秘密の化身也。花簪金釵を以つて飾られたる乙女が小き頭腦の中に、却つて人の思はざる大罪惡の壘まるゝ事あり。脆く優しき女性が眞白き胸の中に、却つて圖らざる奇怪の戀を包まるゝ事あり。此篇の主人公は、不幸薄運を極めたる可憐の一少女也。彼が有する秘密とは何ぞ。篇中には陰謀あり、強姦あり、掠奪あり。作者が圓熟せる文と想とは、詩味蜜の如き經路の中に此の少女が性行を描き盡して、殆んど生命あるものゝ如し。嗚呼、此の少女が秘密とは何ぞや。

押川春浪君著 沖舟君畫

萬國幽靈怪話

刊新

價廿五錢 郵稅四錢

冒險博士押川春浪君が其得意なる奇想と快文とを盡して茲に此怪著あり。此書全世界幽靈怪話の藏むる所中撰りに撰つたる『卅八怪話』にして『伊美人』『露國の獨體奇談』『亞弗利加海底の亡魂』を始め、人をして消魂せしむる材料は『亂髮』眼を瞋らし『電光』を飛ばすが如し。忽ち凄何ぞ珍奇にして怪絶なるや。思ふに日東武勇男兒の外は通誦に堪わざらん!

? 著 小島沖舟君密書(男來る)

女人島漂流記

再版

價三十錢 郵稅四錢

南方一異島あり。女子の数は常に男子に越ね、女子の権力また常に男子に勝る。失戀の苦に悶ねつゝある一青年、野心の外もの無き一青年と共に、海上颶風に遇うて偶々此島に漂流す。奇談あり、艶語あり、冒險あり、珍事あり。以つて失戀家の慰藉たるべし。野心家の慰藉たるべし。文字また尋常の筆致にあらず。請ふ、來つて女人島中の人となれ!

西村渚山君作 沖舟君書(既刊)

空中旅行家 無人島

價五十錢 郵稅二錢

大膽な日本人が一大輕氣球に乗つて空中旅行の途中大颶風に遭つて海洋の一孤島に墜落し、幾多の困苦の後遂に其島を新日本と名け殖民隊の先鋒となつた奇談壯絶!

黒田湖山君作 沖舟君書(再版)

少年露西亞征伐

價八十錢 郵稅二錢

國が小さいからつて馬鹿にされてたまるか、さあ日本少年に勝るなら勝つて見ると勇敢な少年隊の大奮闘! わが愛國心のある少年諸君は是非とも讀まざるべからず。

●明治少年叢書●

千葉紫草君作 沖舟君畫

大力水兵

(刊近)

價十五錢 郵税二錢

押川春浪君作

世界水陸大競走

(刊近)

價十五錢 郵税二錢

藤井紫明君作

夜行富士登山

(刊近)

價十五錢 郵税二錢

▲俳人必携新書▼

諸大家題句 麥人大羽兩君編

俳句大觀

一部 卅部 郵税二錢

(春夏秋冬四部完成)

鳴雪紅葉兩先生題句

●俳句大觀之一● 春之卷 (既刊)

抑も宗鑑貞徳の昔より、元祿天明を通じて、寛政文化を越ね、明治の今に至るまで、秀句五千句を集めてきた。参考書は數るに違わらず、編者の熱心なる季寄の中にあるものは、一題と雖も逸脱あるを好まず、涉獵殆ど盡せり。

●秋の卷……………(近刊)

河村伯爵題字 鄭湖著 (既刊)
獨逸皇帝御愛犬口繪

狩獵百發百中

價五錢
郵稅四錢

銃獵書は少からず而も初歩狩獵家の爲めに、新に狩獵家たらんとするもの、爲めに著されたるもの、實に本書に如くは無し。

向井大放君著

(既刊)

議事堂、井上角五郎氏寫眞挿入

代議士笑話

(破顔の議會)

價三錢
郵稅四錢

第一議會より最近議會までの間に於ける珍事奇聞逸話を集録し盡す真に一讀百笑の珍書たり。

知名諸家序跋 (近刊)

赤木巴山人著

小島沖舟君密書

喜怒多集

無雙美本

價五十錢 郵稅六錢

著書が名の未だ廣く文壇に知られざるは、敢へて文筆を以て直に麴麴を求むるの野士にあらざるが爲めなり。山人一たび稿を起すや、苦心慘憺一字一句を苟もせず、着想最も純潔にして行文流麗を極む。此集は先づ年頃幾多の作物中より其粹を抜けるもの、短篇小説あり、喜劇あり、漫筆あり、紀行文あり、新躰詩あり、俳句あり。若それ雨蕭々たるの春宵、月皎々たるの秋夜、試に通誦一番せよ、其妙趣快味蓋し言ふべからざるものあらん。

誌 雜 ラ カ イ ハ ル ナ 價 安 最

七 八 共 前
十 錢 半 金
一 一 年 卅
錢 年 卅 稅

舌 饒

郵 一 五 每
稅 部 日 月
五 七 發 一
厘 錢 行 回

《論 評 新 之 會 社 治 政 學 文》

め熱憤の取ばや徒罵好本所と最快矯る論に合と不た心一稜
!情憤現て一。た冷ん誌。す得誌は痛奇評茲抱氣春々俠
を紙る狀社部希ら嘲で豈而る意が本痛奇評茲抱氣春々俠
掬の本に會をくんの冷にもる意が本痛奇評茲抱氣春々俠

社 育 美 元 賣 發

